王丸長谷遺跡

－福岡県宗像市王丸所在遺跡の発掘調査－

宗像市文化財調査報告書

第44集

1998

宗像市教育委員会

O U MARU NAGA TANI

王丸長谷遺跡

－福岡県宗像市王丸所在遺跡の発掘調査－

宗像市文化財調査報告書

第44集

王丸長谷遺跡
王丸高熊遺跡
王丸出口遺跡

宗像市教育委員会

序　　文

宗像市は、福岡県の北部で福岡市と北九州市から約30㎞の中間に位置し、周囲を山塊に囲まれた盆地状の地理的特徴を有しています。東西に流れる釣川は、平野部に沖積層の肥沃な土壌を運び、気候にも恵まれているため、農作物の栽培に適した環境をつくっています。

かつての純農村は、昭和36年の国鉄鹿児島本線電化を契機に、福岡・北九州両政令指定都市への通勤圏として大規模な宅地開発が進められ、昭和38年にはじまった市東部の自由ヶ丘団地の造成、昭和41年にはじまった日の里団地の造成、さらには2つの大学の進出もあって、人口が急増し、活気ある住宅・学園都市として発展を遂げ、今日にいたっております。

急速な都市化は、おのずと自然環境や歴史的景観の変貌を伴うものであり、残念ながらほとんどの文化財は消滅の危機にさらされ、常に緊急な保存対策を迫られ、失われていく埋蔵文化財に対しては、緊急発掘調査を実施して、記録保存に努め多くの歴史を解明する成果をあげてまいりました。

本報告の王丸長谷遺跡は、宗像市南西部の土砂採取に伴う緊急発掘調査であり、丘陵上に並ぶ古墳時代後期の円墳の調査記録を納めております。

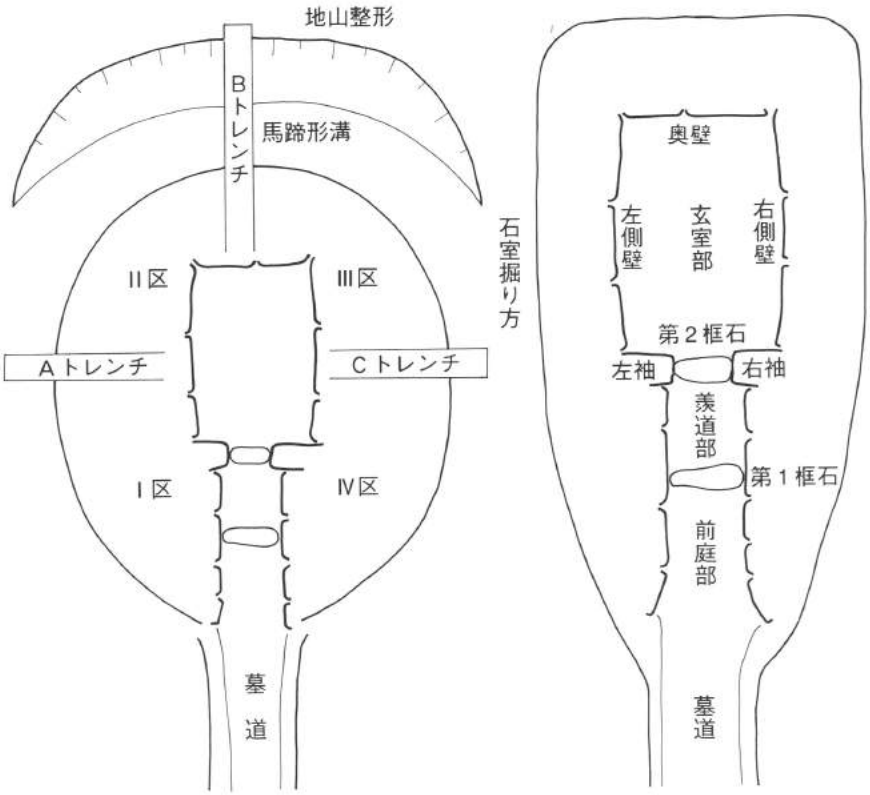
本書が広く文化財の保護および学術研究に貢献することを念願いたしますとともに、発掘調査全般にわたってご協力をいただいた多くの方々に心からの感謝の意を表す次第であります。

平成10年3月31日

宗像市教育委員会
教育長　林　　英典

例　　言

1. 本書は、平成９年度土砂採取工事に伴い、緊急発掘調査を実施した王丸長谷遺跡（宗像市大字王丸長谷1153ほか）および周辺遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、宗像市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 福岡県文化財番号は、王丸長谷遺跡（330669）・王丸高熊遺跡（330667）・王丸出口遺跡（330569）とする。
4. 本報告書の遺物番号は、遺構ごとの通し番号である。
5. 測量は、国土調査法第Ⅱ座標系を用い、方位は磁北である。
6. 遺構の実測及び写真は、王丸長谷遺跡を岡崇、白石康弘、王丸高熊遺跡を白木英敏、王丸出口遺跡を安部裕久がそれぞれ担当した。
7. 遺物の実測は、安部、岡、小樋千鶴子が、遺物写真の撮影は、岡がおこなった。
8. 遺構、遺物の製図は、中原美知子、多比良佳奈子が、遺物の整理は、浅倉弥生、西村広子、田代貞子、田崎紘子、東和子、濱田広美がおこなった。
9. 本書の執筆および編集は、岡がおこなった。



第１図　調査区および遺構の名称

本 文 目 次

第1章　序説　1
第2章　位置と環境　4
第3章　王丸長谷遺跡　7
第4章　王丸高熊遺跡　24
第5章　王丸出口遺跡　28
第6章　まとめ　34

挿 図 目 次

第 1 図　調査区および遺構の名称　例言
第 2 図　周辺遺跡分布地図（1／25000）　2
第 3 図　王丸長谷遺跡・王丸高熊遺跡周辺遺跡分布図（1／5000）　5
第 4 図　王丸出口遺跡周辺遺跡分布図（1／5000）　6
第 5 図　王丸長谷遺跡現況地形測量図（1／400）　8
第 6 図　王丸長谷遺跡遺構配置図（1／400）　8
第 7 図　王丸長谷遺跡1号墳主体部実測図（1／40）　10
第 8 図　王丸長谷遺跡2号墳主体部実測図（1／40）　12
第 9 図　王丸長谷遺跡3号墳・4号墳主体部実測図（1／40）　18
第10図　王丸長谷遺跡5号墳主体部実測図（1／40）　20
第11図　王丸長谷遺跡出土土器実測図（1／3）　22
第12図　王丸長谷遺跡出土金属器・装身具実測図（1／3）　23
第13図　王丸高熊遺跡遺構配置図（1／200）　25
第14図　王丸高熊遺跡1号墳主体部実測図（1／40）　25
第15図　王丸高熊遺跡出土鉄器実測図（1／40）　27
第16図　王丸出口遺跡遺構配置図（1／200）　29
第17図　王丸出口遺跡1号墳主体部実測図（1／40）　30
第18図　王丸出口遺跡出土鉄器実測図（1／3）　31

表 目 次

第 1 表　周辺遺跡一覧表　2
第 2 表　古墳の規模一覧表　32
第 3 表　古墳主体部計測表　32
第 4 表　王丸長谷遺跡土器計測表　32
第 5 表　金属器・装身具計測表　33

図 版 目 次

図版 1　（1）遺跡周辺の航空写真（1／12,500）昭和53年6月撮影
（2）王丸長谷遺跡全景（東から）　（3）王丸長谷遺跡全景（北から）
図版 2　（4）1号墳現況（南から）　（5）1号墳現況（北から）
（6）1号墳閉塞石（玄室から）　（7）1号墳閉塞石（上から）
（8）1号墳主体部（東から）　（9）1号墳主体部（南から）
（10）1号墳主体部（框石除去）　（11）1号墳玄室部（右側壁根石）
図版 3　（12）2号墳主体部　（13）2号墳羨道部から玄室を臨む
（14）2号墳閉塞石（墓道から）　（15）2号墳閉塞石（北から）
（16）2号墳玄室内出土遺物　（17）2号墳羨道内出土遺物
図版 4　（18）2号墳玄室部（奥壁）　（19）2号墳玄室部（奥壁根石）
（20）2号墳玄室部（左側壁）　（21）2号墳玄室部（左側壁根石）
（22）2号墳玄室部（右側壁）　（23）2号墳玄室部（右側壁根石）
図版 5　（24）3号墳4号墳全景　（25）3号墳主体部
（26）3号墳閉塞石（玄室から）　（27）3号墳玄室内出土遺物
（28）4号墳主体部（東から）　（29）4号墳主体部（南から）
図版 6　（30）5号墳遠景（南から）　（31）5号墳主体部
（32）5号墳玄室部（左側壁）　（33）5号墳玄室部（奥壁）
（34）5号墳玄室部（右側壁奥壁コーナー）　（35）5号墳玄室部（右側壁）
（36）5号墳玄室内出土遺物　（37）5号墳玄室部（根石）
図版 7　（38）～（40）2号墳玄室内出土遺物
（41）～（43）2号墳墓道出土遺物
図版 8　（44）～（52）2号墳羨道部出土遺物
図版 9　（53）～（56）3号墳馬蹄形溝内出土遺物
（57）～（60）3号墳玄室内出土遺物
（61）5号墳玄室内出土遺物
図版10　（62）王丸高熊遺跡遠景（南西から）　（63）1号墳近景（南から）
（64）1号墳主体部（西から）　（65）1号墳玄室部（左側壁）
（66）1号墳玄室部（奥壁）　（67）1号墳玄室部（右側壁）
図版11　（68）王丸出口遺跡遠景（北から）　（69）1号墳近景（北から）
（70）1号墳玄室部　（71）1号墳玄室部（右側壁）
（72）王丸出口遺跡・王丸高熊遺跡主体部内鉄器出土遺物

第1章　序　　説

1．調査の経過

宗像市は、福岡市と北九州市の中間に位置しており、両政令都市の通勤圏内にあって急速な人口増加に伴い、宅地造成や道路整備などの開発の波が押し寄せている。

本遺跡に近い日の里団地は、昭和41年に造成が始まり、自由ヶ丘団地と並ぶ市の2大団地である。

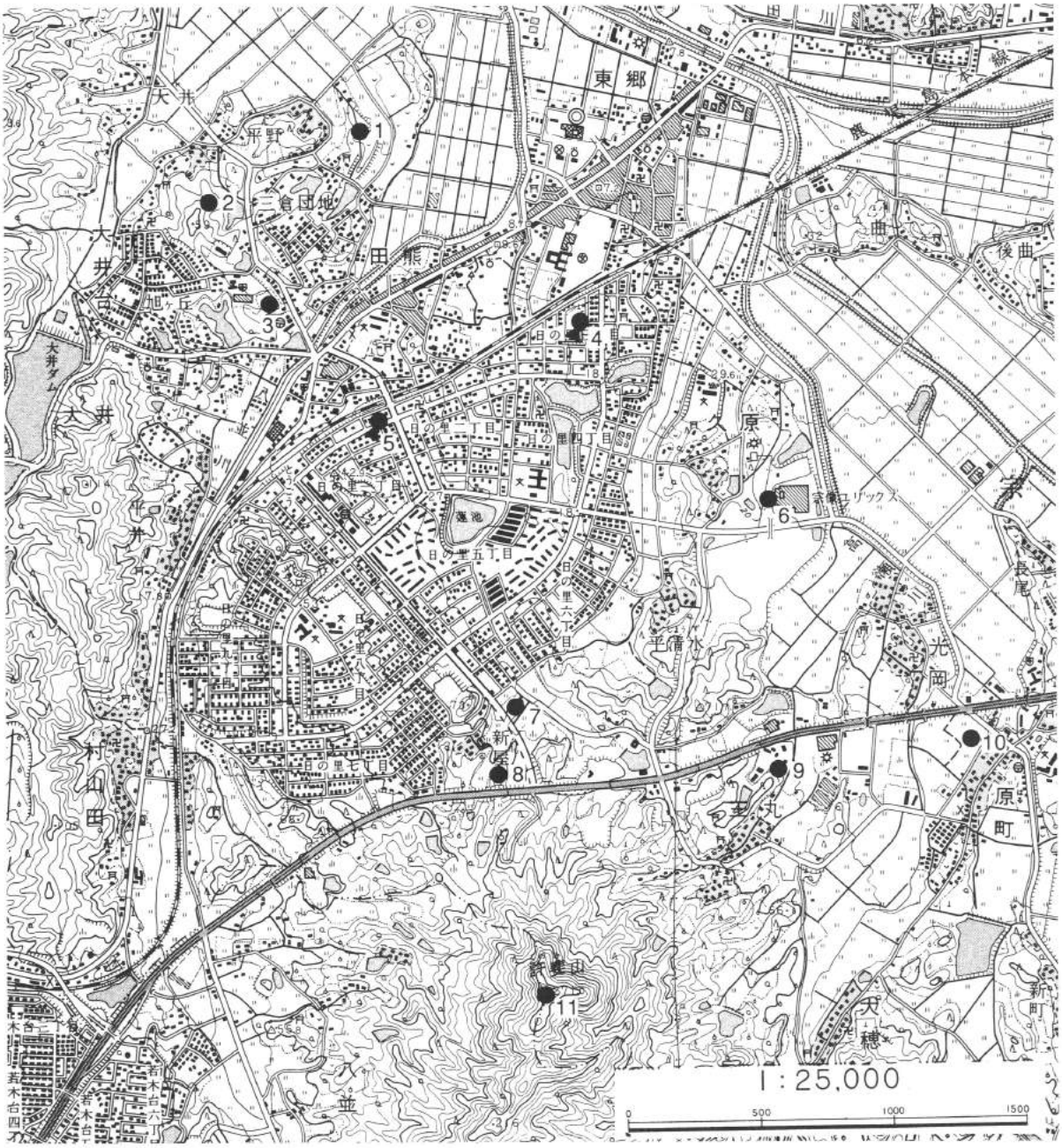
王丸地区は、かつて山野が広がり民家の少ない地域であったが、人の往来が激しくなった近年、国道3号線の拡幅や日の里団地と国道を結ぶ幹線道路の整備、さらには国道周辺の開発といった交通と流通の場へと変貌しつつある。また、良質の花崗岩風化土が産出するため、土砂採取等の工事がおこなわれ地形の変更が避けられない状況である。

このような中で、王丸長谷遺跡、王丸高熊遺跡、王丸出口遺跡は、緊急発掘調査を実施し、報告することとなった。

王丸長谷遺跡は、花崗岩風化土の採掘される丘陵として土砂採取が進み、現状保存が極めて困難であるため記録保存という形で対処した。調査範囲は、宗像市大字王丸（字長谷）1162-2、1135、1153、1156－1～3、1158－2と4、1151－1番地周辺で、面積約1000㎡、標高52ｍから71ｍである。遺構は、古墳が5基検出され調査を実施した。調査期間は、平成8年4月1日から着手し、平成9年4月30日に終了した。調査は、土砂採取と併行しておこなったため3回にわけて実施した。

王丸高熊遺跡は、王丸長谷遺跡と同様に良質な花崗岩風化土の採掘される丘陵として土砂採取が進み、現状保存が極めて困難であるため記録保存という形で対処した。調査範囲は、宗像市大字王丸（字高熊）1231番地周辺で、面積約200㎡、標高46.60ｍから52.80ｍである。遺構は、その頂部に古墳が1基検出され調査を実施した。調査は、平成6年4月20日から着手し、同年6月6日に終了した。

王丸出口遺跡は、詳細分布調査時に、崖面より石室が半壊した状態で発見された。現状は、国道3号線周辺の宅地造成に伴い、元来山林であったところが、著しく改変されている。このままでは自然崩壊が進み全壊する危険があったため、緊急発掘調査を実施した。調査範囲は、宗像市大字王丸（字出口）427－9周辺で、面積約50㎡、標高34.50ｍから40.25ｍである。調査は、平成5年4月19日から着手し、同年5月28日に終了した。



第２図　周辺遺跡分布地図（1/25,000）

番号	登録番号	遺跡名	所在地	時代	報告書	特記事項	備考
1	330433	大井三倉	大字大井272他	古墳・弥生	第10集・第11集	弥生の環濠・蛇行鉄器	調査後消滅
2	330654	大井池ノ谷	大字大井563他	古墳		石棺より人骨多数検出	調査後消滅
3	330794	田熊下平井	大字田熊1218他	古墳・弥生		石棺より捩文鏡	調査後消滅
4	330413	東郷高塚	大字東郷701・702・703他	古墳	第21集	宗像で古い前方後円墳	公園
5	330418	スベットウ古墳	大字田熊640他	古墳	東郷遺跡群		調査後消滅
6	330506	久原遺跡	大字久原388他	弥生・古墳中世	第19集	銅剣・銅矛や埴輪など出土	一部公園
7	330667	王丸高熊	大字王丸1231他	古墳	今回報告		調査後消滅
8	330669	王丸長谷	大字王丸1153他	古墳	今回報告		調査後消滅
9	330569	王丸出口	大字王丸427-9他	古墳	今回報告		現状維持
10	330793	光岡六助	大字光岡279-1他	古墳		住居跡・河川	調査後消滅
11	330782	許斐山	大字王丸623他	中世		山城	公園

第１表　周辺遺跡一覧表

2．組織と構成

平成5年度　王丸出口遺跡発掘調査組織構成

総　　括	宗像市教育委員会	教　育　長	森　下　照　清
		教育部長	芹　野　温　亘
		社会教育課長	吉　田　繁　利
		文化係長	原　　俊　一
庶務・会計			原　　俊　一
発掘調査担当		主任技師	安　部　裕　久

平成6年度　王丸高熊遺跡発掘調査組織構成

総　　括	宗像市教育委員会	教　育　長	森　下　照　清
		教育部長	芹　野　温　亘
		社会教育課長	花　田　俊　六
		文化係長	原　　俊　一
庶務・会計			原　　俊　一
発掘調査担当		技　　師	白　木　英　敏

平成8年度　王丸長谷遺跡発掘調査組織構成

総　　括	宗像市教育委員会	教　育　長	森　下　照　清（前任）
			林　　英　典（現任）
		教育部長	中　野　和　人
		社会教育課長	藤　野　英　美
		文化係長	原　　俊　一
庶務・会計		主任主査	織　戸　敏　子
発掘調査担当		技　　師	岡　　崇
		嘱　　託	白　石　康　弘

平成9年度　報告書作成組織構成

総　　括	宗像市教育委員会	教　育　長	林　　英　典
		教育部長	織　戸　勝　也
		社会教育課長	藤　野　英　美（前任）
			井　上　　弘（現任）
		文化係長	原　　俊　一
庶務・会計		主　　事	井　上　幸　恵
報告書担当		技　　師	岡　　崇

第2章　位置と環境

王丸周辺は、宗像市と宗像郡福間町との境にある許斐山（271 m）から北および北東方向に派生する丘陵上に多くの遺跡が点在する。また、この丘陵一帯の地質は、北崎花崗閃緑岩と呼ばれる火成岩からなっており、地表近くでは、花崗岩が風化して形成された真砂土を産出する。

王丸地区において現在確認された遺跡のほとんどは石室墳で、それらを西から順に記すると次の通りである。

王丸高熊遺跡（第3図－1・2）は、現在日の里団地の南端に位置し、許斐山から北方向に派生する丘陵の西端に位置している。行政区では、大字王丸1191、1186－1、1184、1231番地周辺である。遺構は、4基以上の古墳からなる。今回は、同丘陵の先端に所在する古墳1基を報告する。谷を挟んで東側は、王丸長原遺跡・王丸長谷遺跡である。

王丸長原遺跡（第3図－3）は、王丸長谷遺跡が所在する丘陵と同一の丘陵で、国道3号線を挟んで南側に位置する。行政区では、大字王丸998、999－2、1000番地周辺である。遺構は、2基以上の古墳からなる。谷を挟んで東側は、王丸清勢Ｂ遺跡・王丸清勢Ｃ遺跡である。

王丸長谷遺跡（第3図－4）は、王丸長原遺跡が所在する丘陵と同一丘陵で、国道3号線を挟んで北東側に位置している。行政区では、大字王丸1162－2、1135、1153、1156－1～3、1158－2と4、1151－1番地周辺である。遺構は、7基以上の古墳からなる。今回は、調査した5基を報告する。谷を挟んで東側は、王丸清勢Ａ遺跡である。

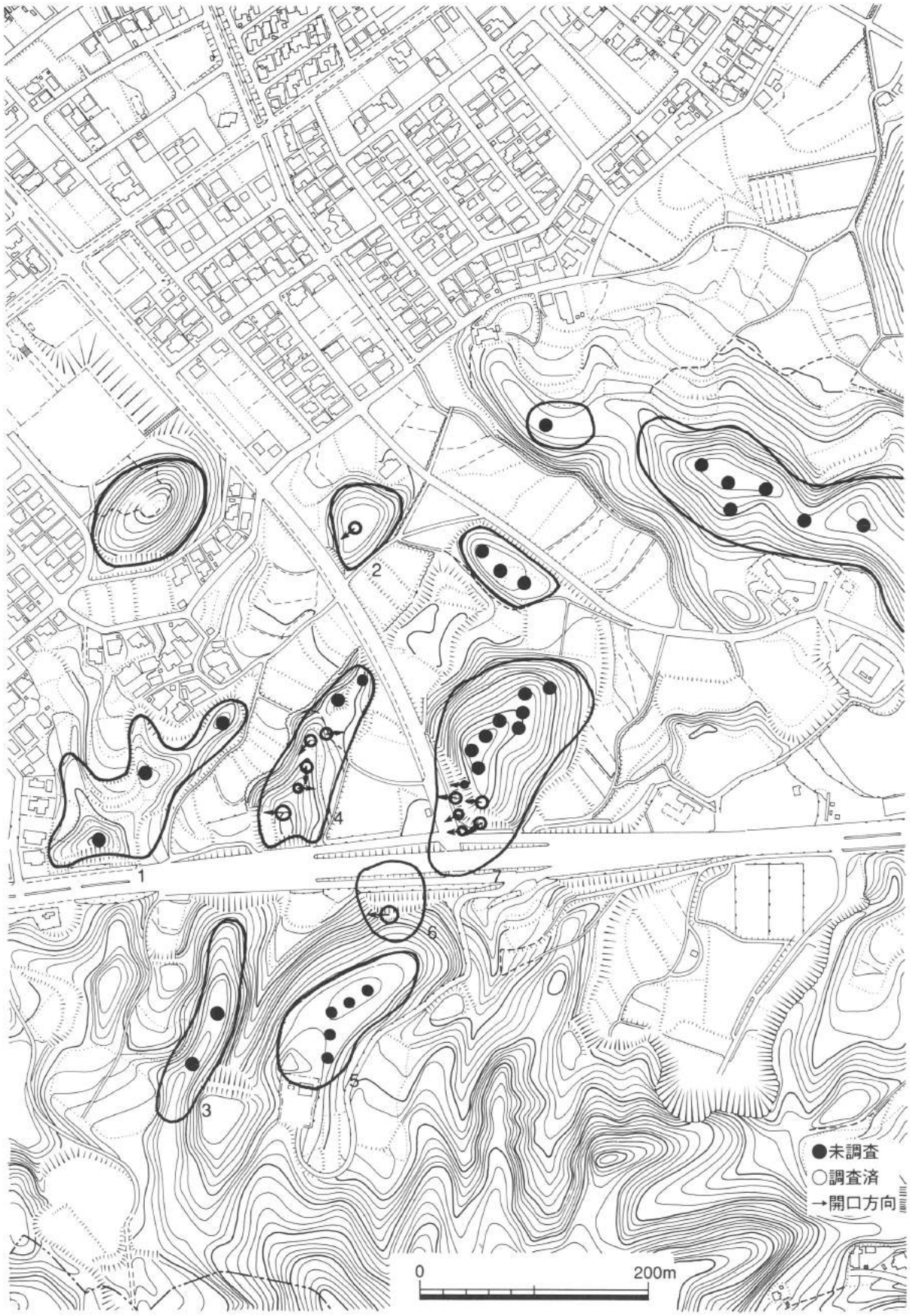
王丸清勢Ｃ遺跡（第3図－5）は、王丸清勢Ａ遺跡が所在する丘陵と同一丘陵で、国道3号線を挟んで南側に位置している。行政区では、大字王丸1013、1015、1017－1番地周辺である。遺構は、5基以上の古墳からなる。

王丸清勢Ｂ遺跡（第3図－6）は、国道3号宗像福間線の拡幅工事に伴って確認された。行政区では、大字王丸1031、1033番地である。平成2年度に古墳1基を調査しその後消滅した。

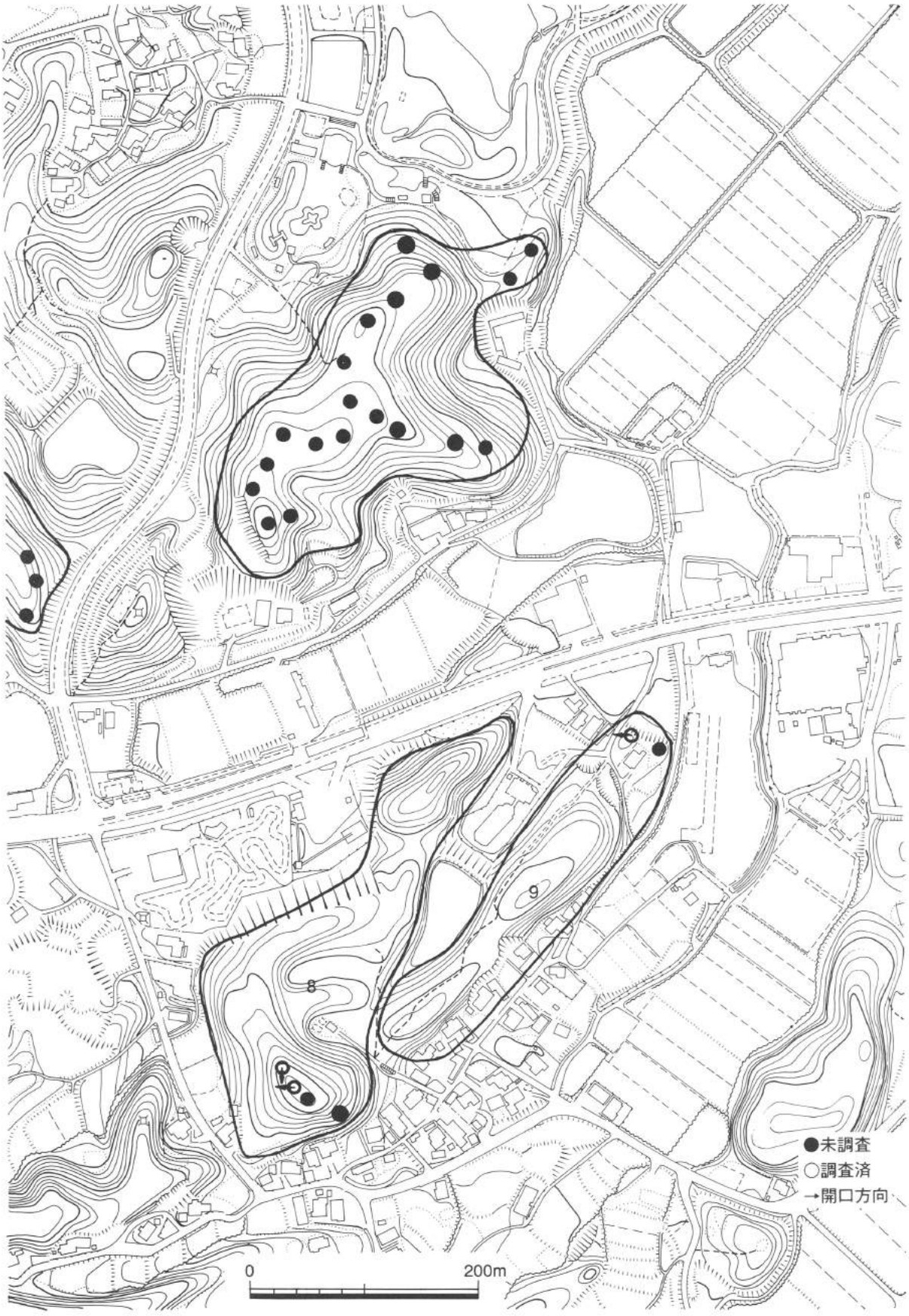
王丸清勢Ａ遺跡（第3図－7）は、王丸清勢Ｂ遺跡・王丸清勢Ｃ遺跡が所在する丘陵と同一丘陵で、国道3号線を挟んで北東側に位置している。行政区では、大字王丸1041－2、1043－1～4、1052番地周辺である。遺構は、14基以上の古墳を確認していたが、国道3号線から東郷駅を結ぶ立体交差の建設に伴い、1041－2、1043－2、4番地の範囲を平成元年度に調査し、古墳6基がその後消滅した。

王丸梅ノ木谷遺跡（第4図－8）は、許斐山より東北東方向に派生する丘陵上である。行政区では、大字王丸531－1番地周辺である。遺構は、古墳4基が確認されている。そのうち平成9年度に2基を調査した。

王丸出口遺跡（第4図－9）は、王丸梅ノ木谷遺跡よりさらに東北東方向に派生する丘陵の先端に位置する。行政区では、大字王丸427－9番地周辺である。遺構は、3基以上の古墳が確認されている。今回崩壊を危惧される1基を報告する。



第３図　王丸長谷遺跡(4)・王丸高熊遺跡(2) 周辺遺跡分布図（1/5,000）



第４図　王丸出口遺跡(9) 周辺遺跡分布図（1/5,000）

第3章　王丸長谷遺跡

Ⅰ．はじめに

本遺跡は、宗像市の南西部、宗像郡福間町との境にある許斐山（271m）の北東裾に派生する舌状丘陵上に所在する。本丘陵の西側の谷を挟んでほぼ平行に伸びる丘陵には、王丸高熊遺跡が所在し、東側の谷を挟んで伸びる丘陵には王丸清勢遺跡が所在している。また南側は国道で切られ独立丘陵状を呈しているが、本来は、1本の舌状丘陵である。国道を境に現在南側を王丸長原遺跡、北側を王丸長谷遺跡と別の名称となっている。

今回の調査地点は、国道3号線の北側で、国道と日の里団地を結ぶ幹線道路の西側に位置している。本丘陵では、良質の真砂土が採掘されるため、土砂採取がおこなわれ、その丘陵上にある古墳の削平が免れなかったため発掘調査を実施した。調査は、土砂採取に必要な範囲で順次実施し、計3回にわたり調査した。1次調査は1号墳と2号墳、2次調査は3号墳と4号墳、3次調査は5号墳である。

本丘陵は、東側斜面が畑地として開墾され、西側は、果樹園の造成などによって階段状に大きく削られており、そのほとんどが篠竹などによって覆われていた。尾根は他の丘陵にくらべると痩せており、現状では、石材の散布や若干の高まりを有していたため、陵線上に古墳が営まれていると想定された。

調査区は、古墳とその周辺を含めて約1000㎡で、調査区内の篠竹や低木などの伐採からおこない、1／100の平板測量で25㎝等高線の現況測量図を作成した。その結果、調査区内の標高は、52mから71mの範囲であった。基準杭は、先に設定し、後に国土調査法第Ⅱ座標を用いて結合する方法をとった。

Ⅱ．発掘調査の記録

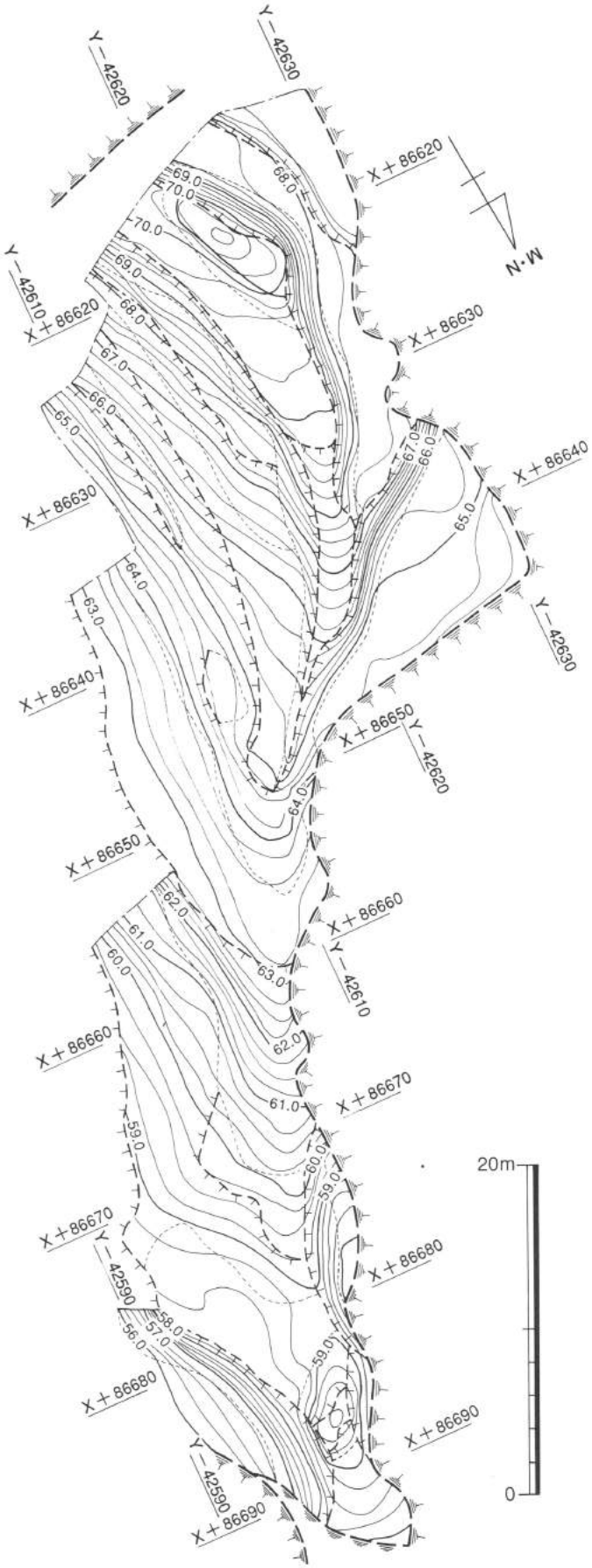
1．1号墳

（1）遺　構

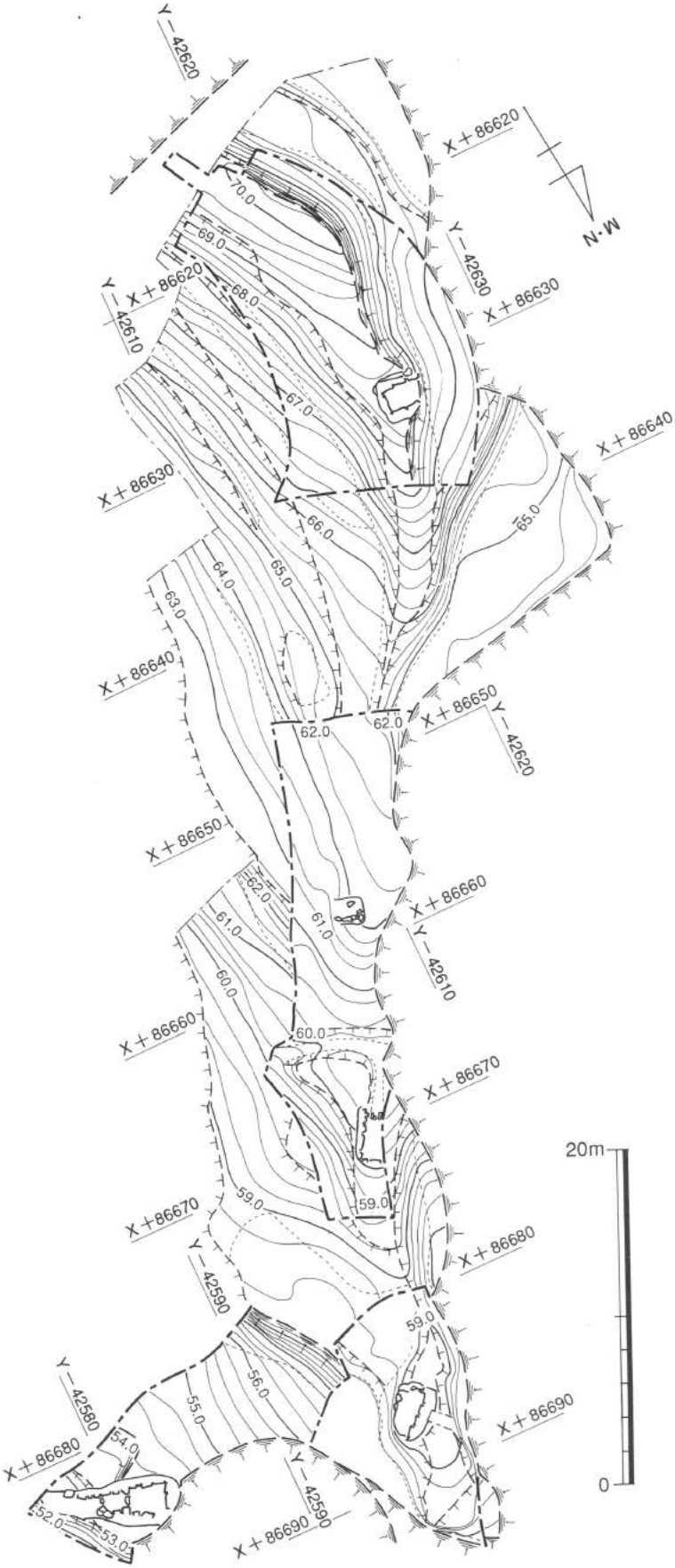
墳丘および外形（第6図・第2表・図版2－4・5）

現状は、59.75mを最高所とし、墳丘の東と西、及び北側の3方が、後世の開墾により大きく削平され、墳丘北側には奥壁部分と想定される石材が転石としてあった。墳丘の規模は直径約8m・高さ約1mの円墳である。

溝は、南西側の尾根を切るように掘られている。形状は、馬蹄形を呈すと思われるが、東西共に墳丘同様削平されているため両端を確認することはできなかった。規模は、残りの良いところで幅2.0m・深さ20㎝を測る。



第５図　王丸長谷遺跡現況測量図（1/400）



第６図　王丸長谷遺跡遺構配置図（1/400）

地山整形は、北側で40㎝以上、南側で60㎝以上削り出して基底部を造り出している。

盛土は、側壁の上半部から天井石を覆うようにあったと想定されるが、既に削平をうけていたために詳細は不明である。

主体部（第7図・第3表・図版2）

本墳の埋葬施設は、主軸をN－51°－Eにとり、尾根方向に開口する単室の横穴式石室である。

墓壙は、腰石の上3段目のところから約60㎝程掘り下げて床面とし、平面プランは長方形を呈す。墓道は、南西短辺に付設している。

石室の破損状況については、天井石および右側の玄室側壁・袖石・前庭側壁を削平によってすべて失う。床面なども右側壁と奥壁のコーナー部分が削られ、敷石なども失う。

石室は、左側の玄室側壁・袖石・前庭側壁が残る。また、右袖石は、石を抜いた痕跡を残し、2枚構成の奥壁も右側1枚が崩落し根石を残すのみとなっている。このことから転石として検出された石材は右奥壁であると想定される。

玄室プランは、やや胴張りの長方形である。

左側壁は、4つの腰石を用いて、その上に石材を積んでいる。玄門から4番目の石材がやや大きいため、玄門から3番目の腰石と、玄門から1番目と2番目の腰石の間に根石を用いて高さを調整している。玄門から3番目と4番目の腰石は、床面から高さ50㎝から60㎝の石材を使用しているのに対し、玄門から1番目と2番目の腰石は、高さが半分であるため2段積みにして高さを調整し、上部は3段から4段までの塊石積みで残る。

敷石は、地山の面に、赤褐色の粘り気の強い粘質土を貼り、その上に花崗岩の角礫（2㎝から10㎝大）を不規則に敷く。一部に赤色顔料が見られる。

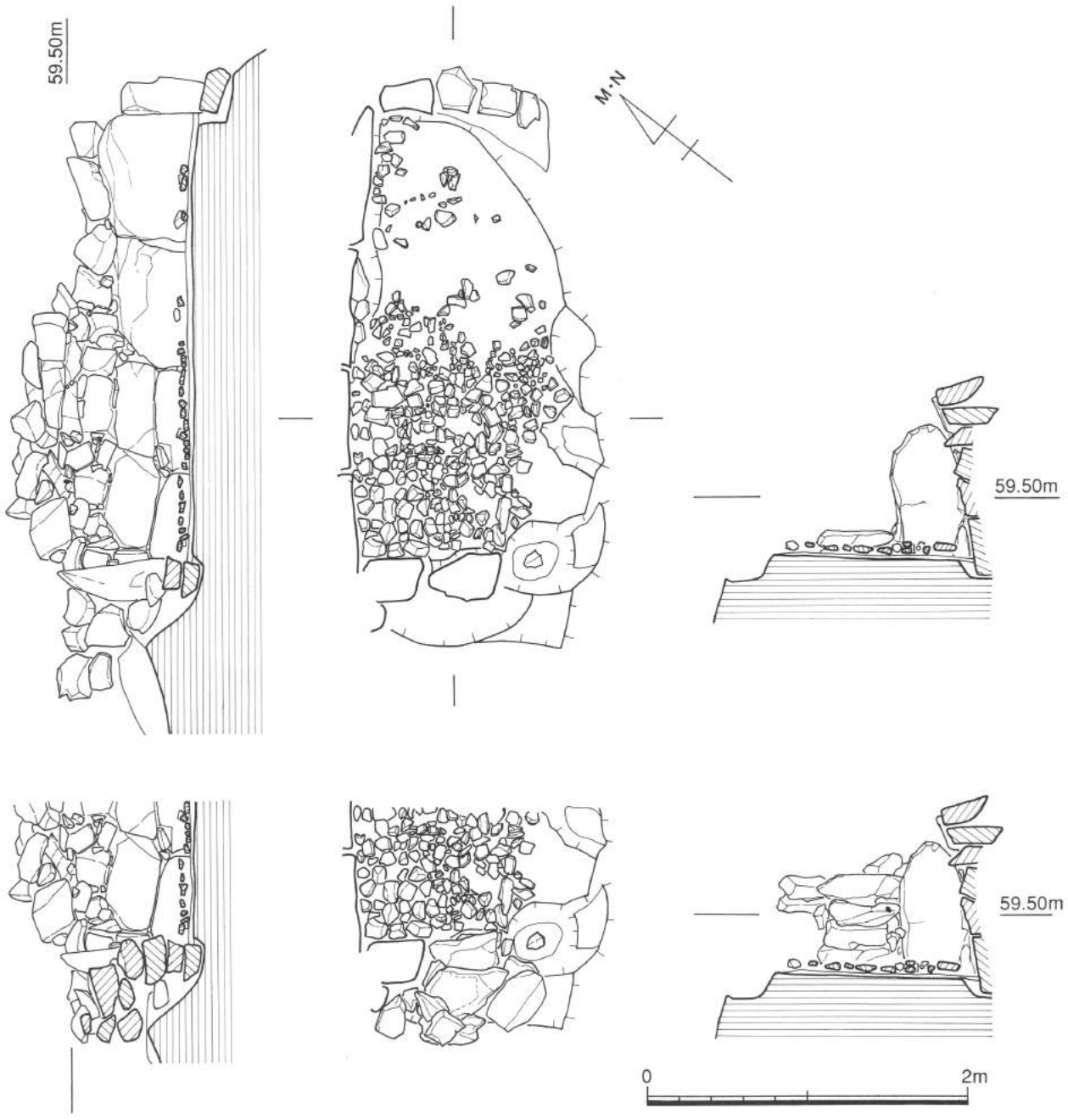
玄門袖石は、左側で高さ96㎝の1つの立石を使用し、玄室と前庭側壁に組み込まれている。右側では、抜き跡と根石を残し欠失する。玄門幅は復元で60㎝を測る。

左前庭側壁は、現状で7石使用し塊石積みで設ける。

閉塞石は、框石の上に平な石材を横に2段積み重ね、さらに墓道側から塊石積みで閉じていたものと推測する。

（2）出土遺物

玄室内や墳丘周辺において、鉄器や土器は出土しなかった。



第７図　王丸長谷遺跡１号墳主体部実測図（1/40）

2. 2号墳

（1）遺　構

墳丘および外形（第6図・第2表）

調査区の北端に位置し、土砂採取の最中に発見された。墳丘や馬蹄形溝などは削平のため検出されなかった。墓道は、南東方向に伸びるが、古墳の南側を通る農道によって北東側の端が削平されていた。

主体部（第8図・第3表・図版3・4）

本墳の埋葬施設は、主軸をN－60°－Wにとり、谷方向に開口する羨道部を設けた横穴式石室である。

墓壙平面プランは、隅丸の長方形を呈し、南東側の1辺がややすぼまり、墓道につながっている。墓壙は、腰石の上2段目のところから約80㎝程掘り下げて床面としている。

石室の破損状況は、天井石や楣石はなく、右側前庭側壁も農道の削平によって失う。

石室は、玄室および羨道からなっており、共に腰石より2段から3段目の積み石まで残っている。

石室プランは、奥壁側がやや長い逆台形である。

奥壁は、2つの石材を使用している。2石は、大きさが異なり、右側は、長さ1.04m・高さ0.80mと規模が大きく、左側は、長さ0.60m・高さ0.64mで小さい。

右側壁の腰石は、3石からなるが、奥壁側の1石が根石を残して欠失する。側壁は腰石の上に30㎝大の円礫を積んで3段目まで残る。

左側壁の腰石は、4石からなる。腰石の下には、玄門から1番目と3番目の腰石に根石を敷いており、基礎を固定し高さを調整している。玄門から2番目の腰石は、他の腰石に比べて幅が狭いため、玄室の長さの調整をおこなったものと想定している。側壁は、右側壁にくらべやや大きい石材を塊石積みしている。

敷石は、玄室側壁や奥壁の周辺に10㎝から20㎝大のやや大きく平な礫を使用し、内側に5㎝前後の角礫を使用している。

玄門部の右袖石は、腰石と同じ高さの石材を用い、その上に1段積んで框石より高さ90㎝とし、また、左袖石は、腰石の高さとほぼ同じ50㎝程度で、その上に2段積んで高さ84㎝とし、楣石をのせていたものと想定する。

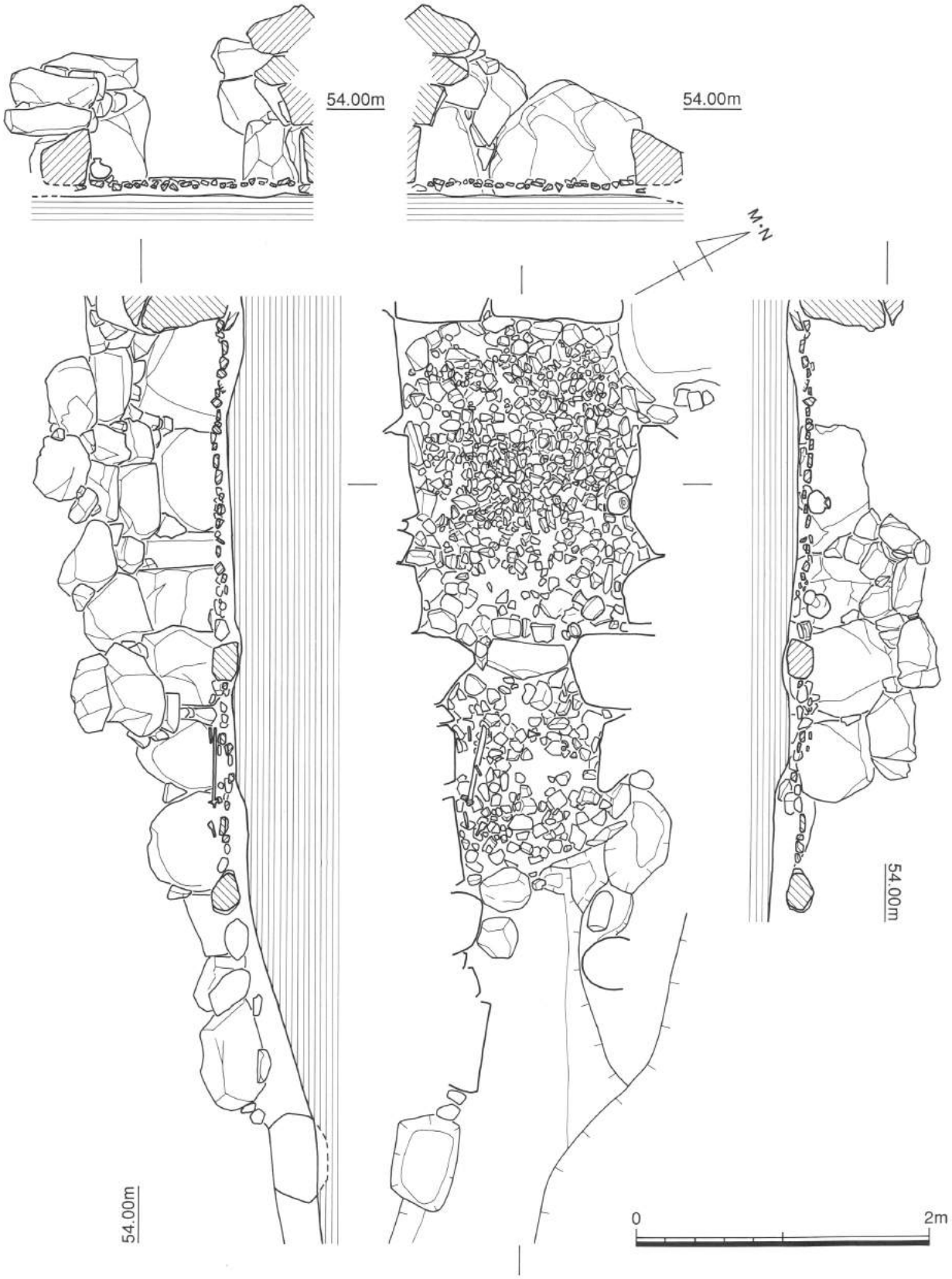
第2框石は、長さ56㎝・幅最大26㎝・厚さ20㎝の石材を右袖石に詰めて横長に据え、空いた部分を小礫で埋める。

羨道部プランは、ほぼ長方形である。

羨道部の側壁腰石は、左右とも2石で組まれるが、右側腰石1石が抜き跡を残して失う。側壁は、右側腰石の上に1段残っているほかは、いずれも腰石のみ残る。

敷石は、玄室と異なり、10㎝大の礫を全面に敷く。

羨門部は、左袖石が残っており、羨道部のプランに比べ狭く、面の丸い石材を使用している。



第8図　王丸長谷遺跡2号墳主体部実測図（1/40）

右袖石は、欠失しているが抜き跡を確認している。

第1框石は、2石で構成され、右側の円礫が残る。

閉塞石は、第1框石の周辺より散らばって検出されたことから、小礫を積み上げて閉じていたものと推測される。

前庭部は、ハの字状に開き、前庭側壁の左側の石材は、3石で構成され、内1石を欠失する。右側の石材は農道により削平される。

（2）出土遺物

土器は、玄室内より3点・墓道より3点出土した。長頸壷と高坏は、玄室右側壁から玄門部にかけてのコーナー床面より検出され、平瓶は、玄室の右側壁中央で腰石に寄せた状態で検出した。墓道からは、土師器の高坏2点と須恵器の甕が破砕した状態で検出された。

金属器は、武器類の鉄刀・鉄鏃などがいずれも羨道部床面より検出され、鉄刀の関の部分には、工具類である鉄斧が付着した状態で出土した。装身具は、羨道部中央のやや右寄りの床面より銀製の耳環が出土した。

土器（第11図・第4表・図版7）

須恵器

平瓶(1)は、ほぼ完形であるが口縁部の一部を欠いている。

頸部は、やや内傾し上位に沈線が1条めぐる。胴部は、扁球形で最大径が中位よりやや上にある。調整は、頸部ヨコナデ調整、胴部、肩部にカキ目の後にナデ調整をし、胴部下半は、静止ヘラ削り調整である。

胎土は、2㎜以下の白色砂粒を含み、焼成は良好。色調は青灰色から黒灰色である。

計測は、口径7.4㎝・器高14.4㎝・頸部径5.3㎝・胴部最大径16.2㎝・底部径8.4㎝を測る。

長頸壷(2)は、口縁部の一部を欠くがほぼ完形である。

頸部は、やや外反しながら広がり上部でやや内湾気味になる。口唇部は丸く仕上げ、内傾する外面には、2条の凹線が施されている。外面内面共に回転ヨコナデ調整である。

胴部は、上半部に最大径を有し、肩部に2条の凹線を施している。外面上半部はナデ調整で底部付近では静止ヘラ削り、底部は、指圧痕が認められる。

胎土は、1㎜から5㎜大の石英や長石の粒子を含む。焼成は良好。色調は青灰色から黒灰色である。

計測は、口径17.8㎝・頸部最小径4.5㎝・胴部最大径16.4㎝・底部径9.4㎝・器高18.5㎝・頸部高7.9㎝・胴部高10.6㎝を測る。

高坏(3)は、ほぼ完形である。

坏部は体部と底部の境がやや屈曲し、屈曲部に沈線状の段を有する。外面の調整は、体部上半部を回転ヨコナデ調整、見込みは不定方向のナデ調整、坏部外面下部は、回転カキ目調整を

施している。

脚部は、基部より大きく外反し、端部はシャープに仕上げている。調整は、内外面ともに回転ヨコナデ調整を施す。

胎土は、白色の細砂粒を多く含み、焼成はやや良。色調は、全体的に暗灰褐色である。

計測は、口径9.6㎝・器高8.2㎝・基部径1.9㎝・脚径7.6㎝を測る。

甕(6)は、墓道より破片で検出された。同一個体の小片が数点出土した中で特徴のある口縁部から頸部を図示した。

口縁部は、肥厚し、口唇部と端部が外へ尖る。頸部は、2条平行の沈線が2列引かれ、その間に縦に長い刺突文が施されている。内面の調整は、ナデで仕上げる。

土師器

高坏(4・5)は、墓道より破砕した状態で出土し、接合した結果2点あった。

(4)は、坏部の口唇部や脚部の口唇部がやや欠損するほかはほぼ完形である。

坏部は、外面上半部でやや屈曲するが、他は丸く仕上げる。調整は、内面に一部ヘラ磨き痕が確認できるが、表面風化が著しく詳細は不明である。

坏部と脚部の接続は、坏部の底部に突起を施し、脚部に差し込むタイプである。

脚部は、屈曲部に段を有し、脚柱部は、縦方向のヘラ削りを施している。

胎土は、白色の細砂粒を多く含む。焼成は、やや良だが表面の風化が進んでいる。色調は、赤褐色から黄褐色で一部黒褐色を帯びる。

計測は、口径12.6㎝・坏部高4.7㎝・基部径3.1㎝・脚部高5.4㎝・脚径9.9㎝を測る。

(5)は、坏部のみ検出された。口縁部は、やや歪み、体部は屈曲せず丸く仕上げている。調整は内面に一部ヘラによる磨きが確認されるが、他は風化が著しいため観察できなかった。

金属器（第12図・第5表・図版8）

武　器

鉄刀(1)は、切先を玄門部側に、背を左側壁に向けて検出された。茎先端を欠くほかは切先までほぼ完存している。

茎は、現存で長さ5.5㎝程と短く、幅は関側で2㎝、現存する先端では1.3㎝と狭くなり、背の厚みは4㎜である。関から1.5㎝のところには、目釘が残っていて、長さ3.1㎝・径5㎜を使用し、把と茎を固定している。

関部には、鍔が残っている。鍔は現状で不定五角形を呈し鞘元が取り付いている。

刀身は、平造りの平背で、断面が2辺の長い三角形である。切先は、背が尖り弧を描いて刃部に達する。一部に木質が残っている。刀身の長さ50.4㎝で、背の厚みが6㎜、幅は鞘元側で3.3㎝、切先側で2.8㎝を測る。

鉄鏃(4～8)は、平根式でいずれも鏃身部が方頭型を呈している。(4)は、篦被から頸部の途中まで残るが、他は鏃身の下部から折れている。

(9)は、尖根式で鏃身部が片刃型である。鏃身部から茎部までほぼ完存する。

(10)は、篦被部で断面が四角である。

(11)は、尖根式で鏃身部のみで長頸型を呈している。

(12・13)は、茎の部分で断面円形を呈し木質が残っている。

工　具

鉄斧(2)は、鉄刀の鍔に付着して検出された。袋部は、錆が付着し内法は計測できなかった。袋部と刃部の境は、斜めに肩を有す。刃部は、弧状を呈しやや斜めに削り出して厚さ4㎜ほどに仕上げている。全長7.7㎝・刃幅4.5㎝を測る。

装身具

耳環(3)は、銀メッキを施したものでやや肉厚である。直径は1.9㎝×2.0㎝でほぼ円形である。断面径は、5.0㎜×6.5㎜で楕円を呈す。対となる耳環は出土しなかった。

3．3号墳

（1）遺　構

墳丘および外形（第6図・第2表）

1号墳より20mほど南の地点の尾根上で検出された。

現状は、標高61.25mの所で若干の高まりを呈し、地表面には石材が散在していた。墳丘の西側および東側は、開墾による崖落ちで削平される。尾根上の南北は、かろうじてその原形を留めている。

溝は、主体部の南側の尾根を切るように検出された。形状は、馬蹄形であるが、西側は、やはり崖落ちによって削平される。規模は、幅1.68m・深さ0.4mを測る。

墓道は、馬蹄形溝につながる。

主体部（第9図・第3表・図版5－24～27）

本墳の埋葬施設は、主軸をN－37°－Eにとり、尾根方向に開口する単室の横穴式石室である。

墓壙平面プランは、隅丸の長方形を呈し、南西側の短辺に墓道が付設され、やや上がりぎみで馬蹄形溝とつながる。墓壙の深さは、墓壙検出面から床面地山まで約90㎝掘り下げられている。

石室の破損状況は、天井石はなく、玄室左側壁や袖石なども開墾による崖落ちで既に床面から失う。

玄室プランは、残る右側壁と奥壁から推測してほぼ長方形である。

奥壁は、2つの石材が用いられ、左側は幅約70㎝・高さ約50㎝と大きく、右側は幅約30㎝・高さ約40㎝とやや小振りの石材を使用している。

右側壁は、4つの腰石の上に3段から4段目まで残っている。腰石は、玄門から1番目が幅40㎝・高さ40㎝の正方形の石材を使用しているほかは、低く細長い石材を使用していることから、石室プランの調整をおこなっているものと想定している。

玄門から2番目と3番目の腰石の上には、高さ幅とも約50㎝の大型の石材を積んでいるため高さが合わず、玄門から1番目と4番目の腰石の上に1段から3段分の石材を積んで、高さを調整し、4段目をほぼ水平に積んでいる。

敷石は、10㎝から20㎝大の角礫を用い、中央の縦軸と左端の縦軸の列を基準にして敷いているものと推測される。

玄門部右袖石は、側壁と前庭側壁の間に組み込まれており、高さ40㎝・幅28㎝の立石の上に2段積み上げられた框石上面から高さ73㎝を有し、その上に天井石を積んでいたものと想定される。また、左袖石は、削平によって失う。

框石は、床面より高さ20㎝ほどの段になっており、幅20㎝から30㎝の石材2つを左袖石に詰めて置かれ、右袖石との隙間に石材を噛ませてある。

閉塞石は、框石の上より4石を台状に設け、長さ66㎝・高さ36㎝・幅20㎝の板状の石を置き、その上に長さ84㎝・高さ20㎝・幅最大40㎝の礫で天井石との間を塞いだものと想定される。

前庭側壁は、右側のみ検出され1列の3段積みで簡素である。左側は、削平によって失う。

(2) 出土遺物

土器は、馬蹄形溝内よりほとんど破砕した状態で出土した。主に須恵器の甕が検出され4個体程度確認できた。土師器なども出土しているが、小片であるため当古墳の年代決定になり難く、実測も不可能であった。

鉄器は、武器類の直刀や鉄鏃などが出土し、装身具は、ガラス玉が出土している。いずれも玄室内床面から検出された。

土　器（第11図・第4表・図版9－53～56）

須恵器

甕(7～10)は、いずれも墓道より破砕した状態で検出された。接合の結果4個体あったが、完形はなく特徴的な口縁部を図化した。

(7)は、口縁部から肩部である。口縁端部は、肥厚して段を有する。頸部は、緩く外反し、内外面ともにヨコナデ調整である。肩部は、丸身があり外面は平行叩きの後回転カキ目調整を施す。内面は同心円の圧痕である。計測は反転復元であるが口径17.8㎝・頸部径12.2㎝を測る。胎土は白色の細砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は、青灰色から灰褐色である。

(8)は、口縁部から肩部にかけての小片である。頸部下半は、直線的で上半から外反し、端部は外に張り出して段を有す。頸部と胴部の境は、外面でやや屈曲し内面は丸く仕上げる。調整はいずれもヨコナデ調整である。肩部の調整は、外面平行叩きの凹みに自然釉が付着している。内面は、同心円の圧痕である。胎土は黒色粒および白色粒を含みシルト質である。焼成はやや良。色調は全体的に黄灰色で断面と頸部は暗灰色である。

(9)は、口縁部から頸部にかけての小片である。頸部は、外反し端部は外に張り出してシャープな段を有す。頸部内面から端部は、ヨコナデ調整で、外面は、風化が著しいが、波状文を確認できた。胎土は、白色の小礫を含みやや軟質である。焼成はやや良で色調は全体的に黄灰色である。

(10)は、口縁部から頸部にかけての小片である。頸部はやや外反し、端部外面は、2本の沈線で肥厚した状態を削り出し、内面は段を有す。頸部と胴部の境は、内面で屈曲し、外面は丸く仕上げる。調整は、いずれもヨコナデ調整である。胎土は、黒色粒や白色粒を多く含み軟質である。焼成は不良で色調は薄い緑灰色である。

鉄器その他（第12図・第5表・図版9－57～60）

武　器

鉄刀(16)は、玄室床面の中央部分で右腰石に沿って出土した。切先は、奥壁側を向き、刃は腰石側を向いていた。

茎は、現存で長さ8.8㎝・幅1.5㎝を測る。表面は錆が被うとともに木質が一部残っていたが、目釘穴は、確認できなかった。

関は、背の部分で段を有し、腹の部分では茎に1.5㎝よったところで傾斜が始まる。

刀身は、平造りの平背で、断面が2辺の長い三角形である。切先は背の方から刃にかけて膨らみながら砥いでいる。通常の切先は、背が尖り弧を描いて刃部に達する。このため切先部分が折れその後砥ぎ直したのではないかと推測する。

刀身の長さ57.7㎝で、背の厚みが4㎜、幅は3㎝切先側で2.5㎝を測る。

鉄刀(17)は、玄室床面から出土した刀身の一部である。平造りの平背で、断面が2辺の長い三角形である。16の刀身は、ほとんど完形であるため同一個体ではない。幅2.6㎝で背の厚さは3㎜と薄い。

鉄鏃(18・19)は、平根式でいずれも鏃身部が圭頭斧箭式である。

(18)は、ほぼ完形。鋒長は両辺がほぼ直線的で、鏃身の最大幅から篦被部にかけてやや内傾する。頸部は、木質の繊維が残る。鏃身長8.1㎝・最大幅3.6㎝・頸部長3.6㎝を測る。

(19)は、鋒長の両辺がややふくらみ、鏃身の最大幅から篦被部にかけてやや内傾する。頸部は、木質の繊維が残っているが、篦被から1㎝先より折れている。鏃身長7.5㎝・最大幅3.3㎝を測る。

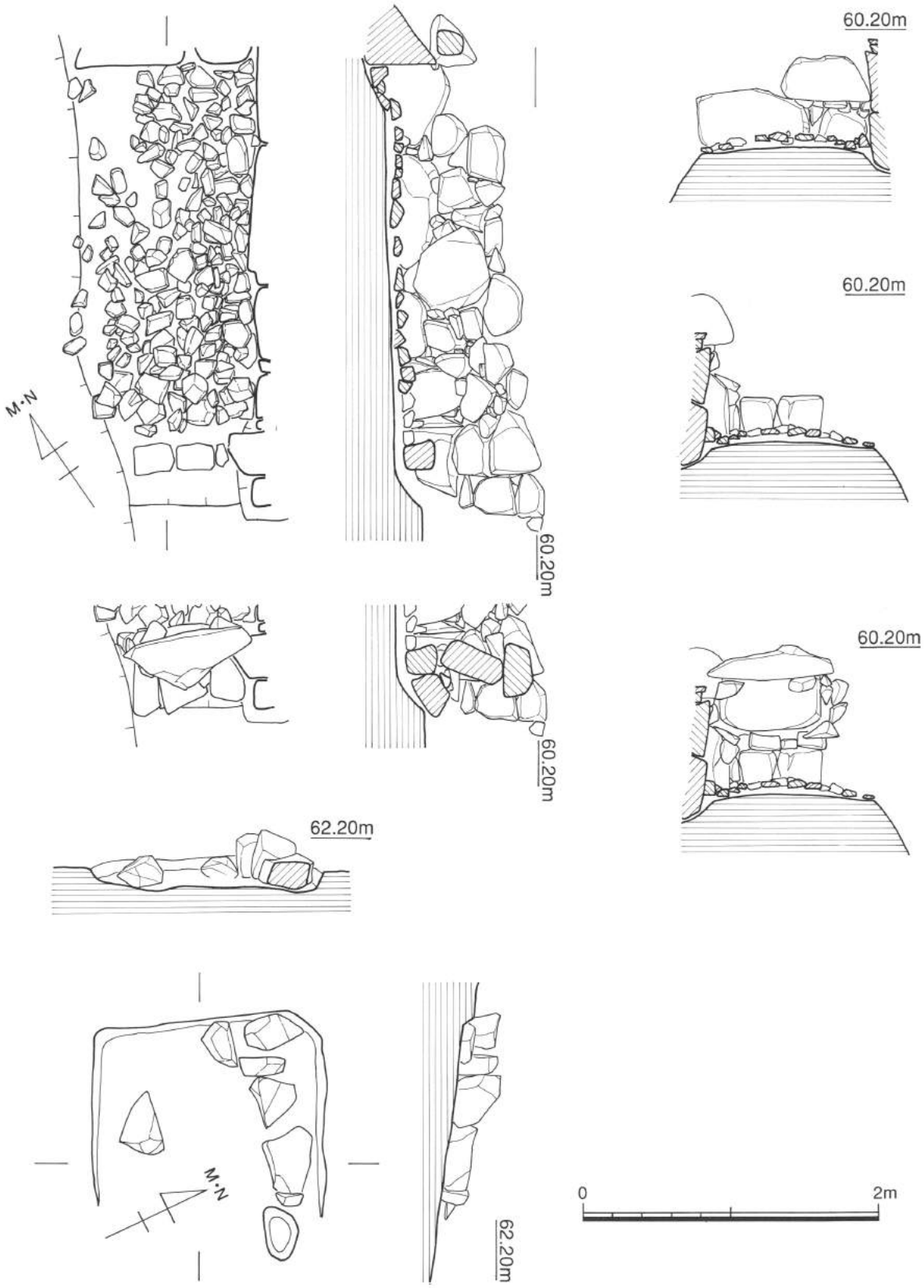
(20)は、平根式で鏃身部が腸抉三角形式を呈している。鋒長と逆刺の両辺がやや段を有している。鏃身部は4.2㎝・最大幅3.6㎝、篦被部は、途中で折れているため現存長で3.6㎝を測る。

装身具

丸玉(21)は、ガラス製で紺色である。中央部は丸く、上・下面は平らに削られている。孔は、径2㎜と一定の大きさで穿たれている。胴部径0.95㎜から1.10㎜・高さ8㎜を測る。

小玉(22・23)は、いずれもガラス製である。

(22)は、淡い緑色である。上面から中央部、下面にかけては、調整を施していない。孔は、径



第９図　王丸長谷遺跡３号墳・４号墳主体部実測図（1/40）

1㎜で一定の大きさで穿たれている。胴部径4.5㎜・高さ4㎜を測る。

(23)は、紺色である。胴部は丸く、上・下面ともに平らに削られている。孔は、径1㎜で一定の大きさで穿たれている。中央部径5㎜・高さ4㎜を測る。

4. 4号墳

(1) 遺構

墳丘および外形（第6図・第2表）

地山整形や墳丘などは削平によって残っていない。

主体部（第9図・第3表・図版5－28・29）

本墳の埋葬施設は、主軸をN－63°－Wにとり南東側の谷方向に開口する小石室である。

石室破損状況は、奥壁・敷石・框石・前庭側壁などはなく、腰石も右側壁の4石と左側壁の1石が残存するのみで、この腰石も動いているものと想定される。

遺物は、出土していない。

5. 5号墳

(1) 遺構

墳丘および外形（第6図・第2表）

古墳は、最も国道3号線沿いに位置し、遺跡内の最高所標高71mからやや南に10mほど下ったフラットな部分に検出された。現状は、古墳周辺に石材が散乱していて、石室墳の崩壊したものと想定された。表土は、重機によって除去し、地表から10㎝ほどのところで腰石を検出した。

墳丘や溝などは、先の開墾によって検出されなかった。

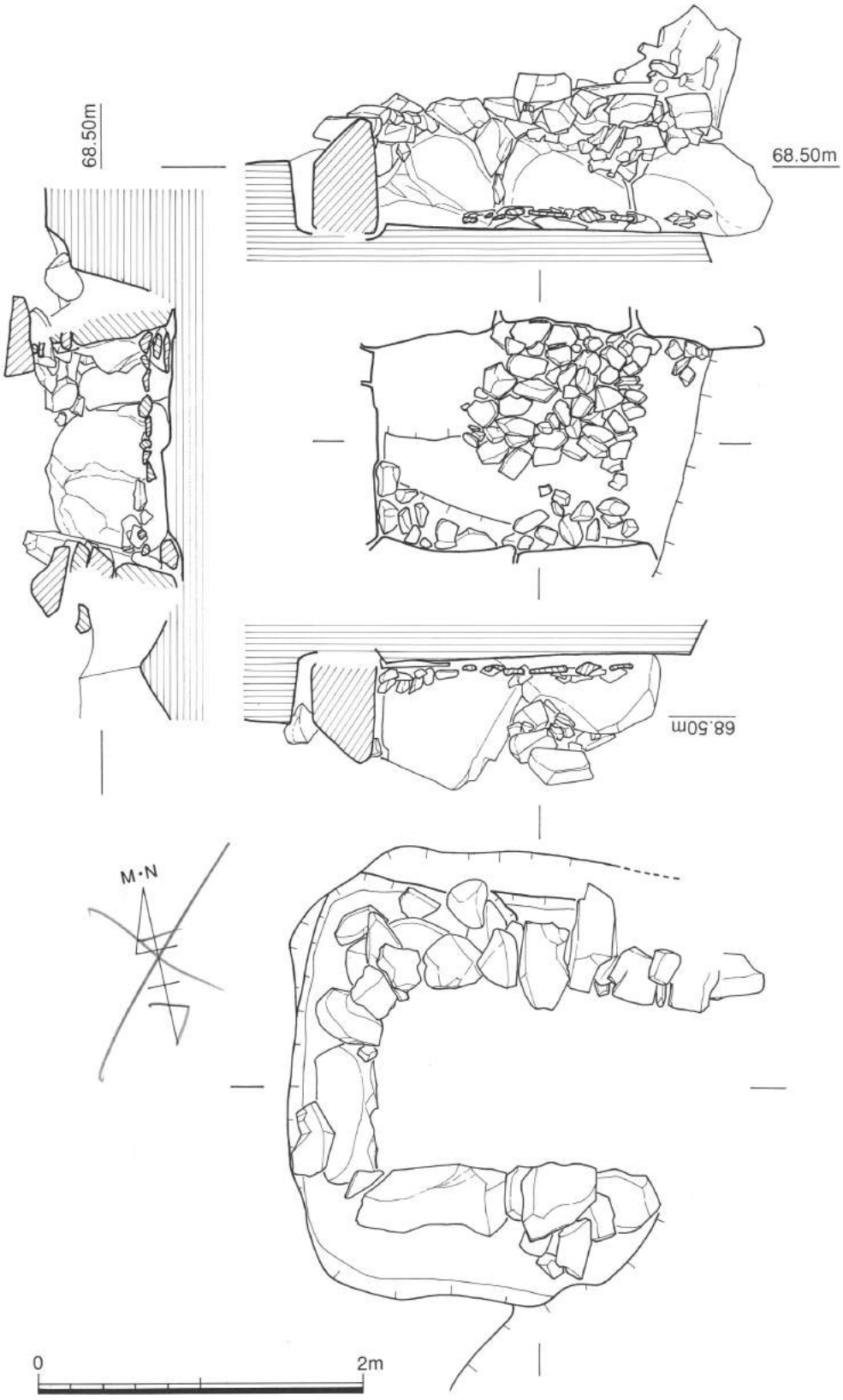
主体部（第10図・第3表・図版6）

本墳の埋葬施設は、主軸をN－78°－Wにとり、ほぼ西側に開口する横穴式石室である。墓壙は、北と南側の一部と東側が「コ」字状に残っていて、平面プランは隅丸長方形を呈していたと推定される。墓壙南側では墓壙壁と石室が密に組み込まれているが、北側では、30㎝から40㎝の開きがあり、作業場として空間を設けたのではないかと推測する。

石室の破損状況については、天井石はなく、墓道側は、玄門部と玄門部側の左腰石1石が開墾時に生じた崖面によって削平されている。

残存部分は、左腰石と奥壁、右腰石の上に積み石が2段から3段確認される。石材はすべて花崗岩を使用し、側壁の一部に赤色顔料がみられる。

玄室プランは、やや胴張りの長方形である。



第10図　王丸長谷遺跡5号墳主体部実測図（1/40）

左側壁は、2石の腰石を用いているが、奥壁から1番目の腰石が高さ80㎝と高く、奥壁から2番目の腰石はその半分と低いため高さをあわせるように小礫で積み上げて調整している。

奥壁は、2石で組まれ、左側は長さ1m・高さ75㎝の大きな石材を使用しているのに対し、右側は、右腰石との隙間を埋めるように幅30㎝・高さ60㎝と小規模な石材を使用している。

右側壁は、3石の腰石を用いており、いずれも幅約70㎝・高さ60㎝大のやや丸い石材を均等に使用している。腰石と腰石の隙間に、縦長の石材や小礫で高さを調整し床面から80㎝のところでほぼ水平に積まれている。

敷石は、花崗岩の角礫（10㎝から30㎝大）で面が平らな部分を上に敷いている。玄室中央には、いくつかの石材に赤色顔料が塗布されている。玄室の奥壁右側と西側は、盗掘や攪乱によって失う。

（2）出土遺物

土器は、出土していないが、鉄器は、玄室床面の右側壁中央より鉄鏃2本出土した。

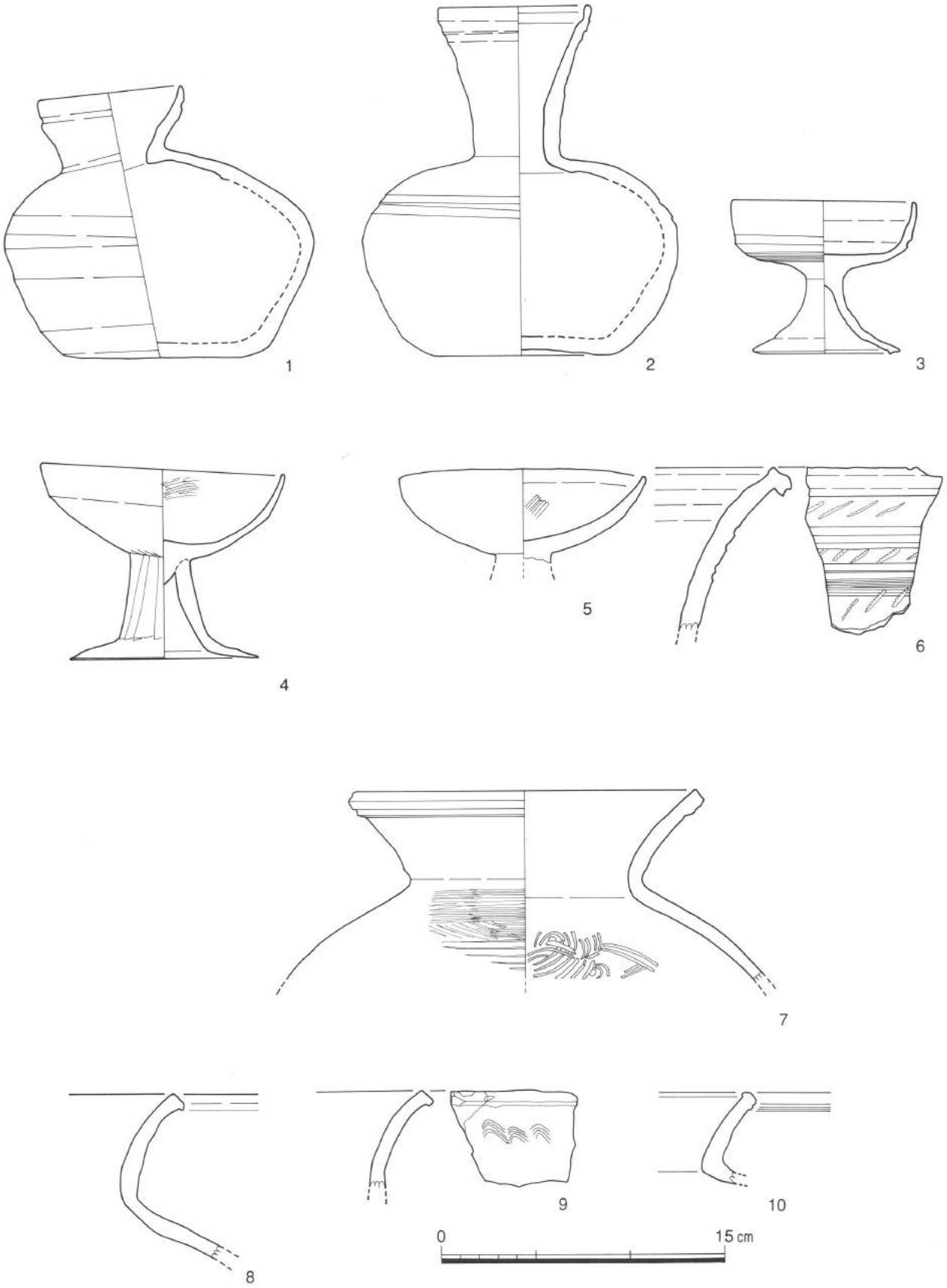
鉄　器（第12図・第5表・図版9－61）

武　器

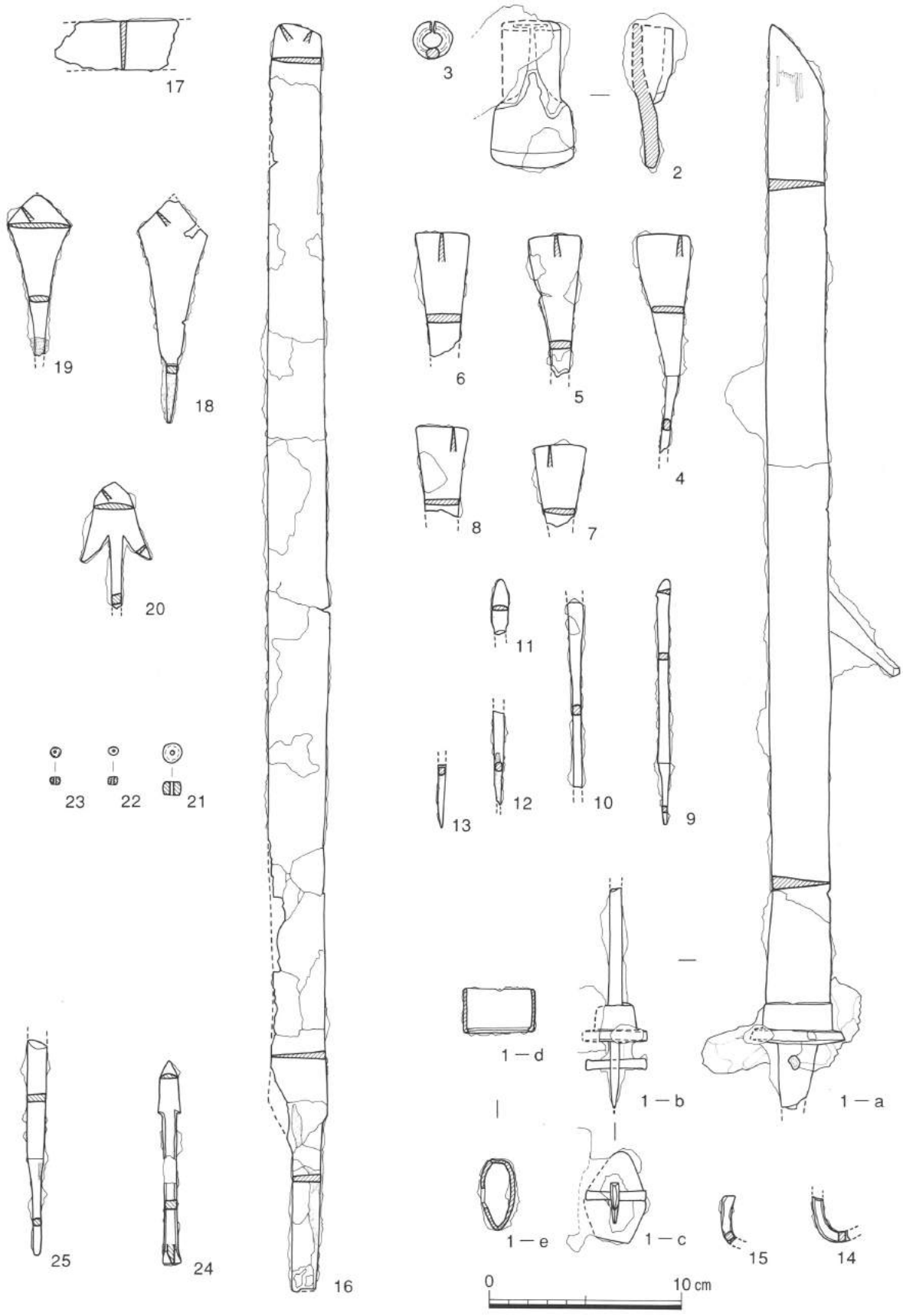
鉄鏃(24)は、右側壁中央で右腰石側に検出された。尖根式で鏃身部が片丸造りを呈している。頸部は、断面長方形である。篦被は、断面台形の刃部状に叩きつぶしている。

鏃身部長2.7㎝・幅1.2㎝・頸部8.0㎝を測る。

(25)は、右側壁中央で右腰石と敷石の間より検出された。尖根式と思われるが鏃身部は折れていて形状は不明である。頸部から茎部の部分で篦被の段を有する。茎部の一部には、木質が残っている。



第11図　王丸長谷遺跡2号墳(1～6)・3号墳(7～10)出土土器実測図 (1/3)



第12図　王丸長谷遺跡2号墳(1～15)・3号墳(16～23)・5号墳(24･25)出土金属器・装身具実測図(1/3)

第４章　王丸高熊遺跡

Ⅰ．はじめに

本遺跡は、宗像市の南西部で、宗像郡福間町との境にある許斐山（271m）の北方向に派生する舌状丘陵上に所在し４基以上の古墳から構成されている。当古墳は、丘陵の先端にあり、現状では、国道３号線から日の里団地を結ぶ幹線道路によって丘陵が切られ独立丘陵状となっている。

王丸地区周辺の地質は、北崎花崗閃緑岩で構成され、地表近くでは、花崗岩が風化した良質の真砂土が採掘される。

今回は、幹線道路沿いに位置し、土砂採取がおこなわれるのに伴って、丘陵頂部の古墳の削平が免れなかったため発掘調査を実施した。

調査区は、古墳とその周辺を含めて約200㎡で、古墳を中心に南北方向に自然地形が残る。自然地形は、標高46.61mから52.83mの範囲で、古墳はその最高所にある。

Ⅱ．発掘調査の記録

１．１号墳

（１）遺　構

墳丘および外形（第13図・第２表）

墳丘の西側は土砂採取などで大きく削られ、東側及び北東側の一部でも削平を受けているが、現状で復元すると径約12mほどの円墳である。

盛土などは、削平や盗掘などによって認められなかった。

墳丘裾は、丘陵の頂上に造墓されているため、地山整形により削り出されている。墳裾から頂部の比高差は、南側で1.3m・北側で約2mを測る。

主体部（第14図・第３表・図版10）

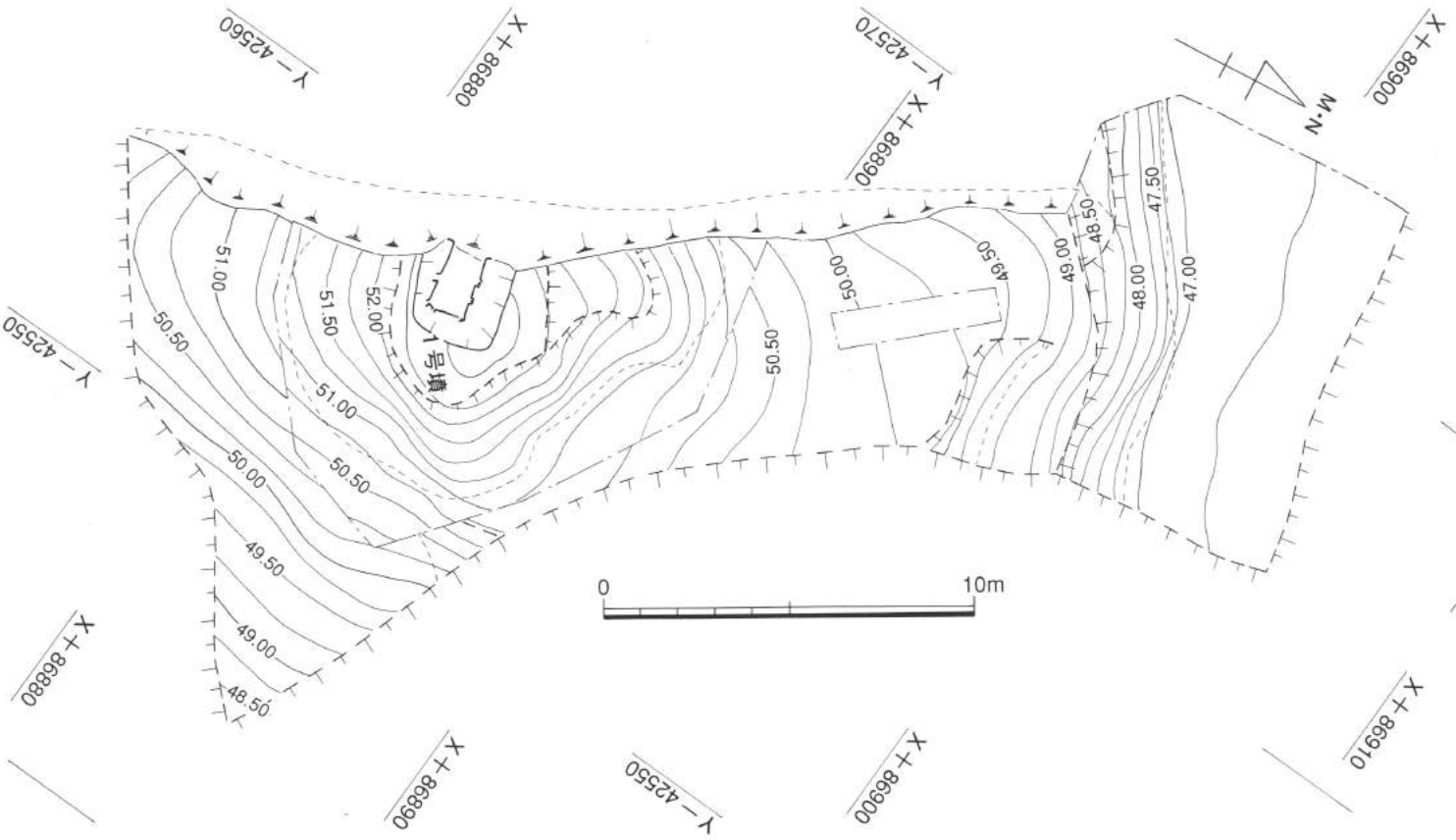
本墳の埋葬施設は、主軸Ｎ－81°－Ｗにとり、西に開口する単室の横穴式石室である。

墓壙は、地山から掘り込まれ、検出平面は、隅丸の長方形である。墓道は、西側の短片に付設されていたものと想定されるが、現状では既に削平される。

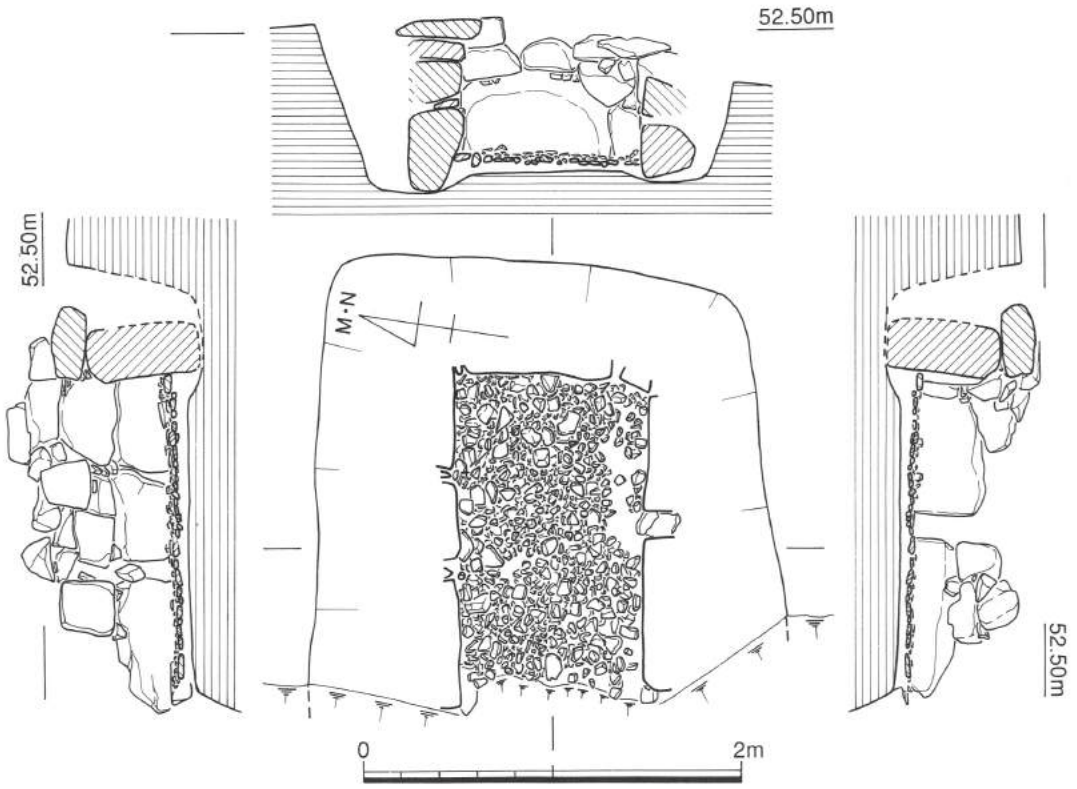
石室の破損状況は、天井石および玄門部、前庭側壁などを失う。

石室は、右側壁の腰石２石・左側壁の腰石３石が残存しているが、玄門部が失われているため正確な腰石の数は確認できない。

奥壁は、２石で構成され、左側が長さ78㎝・高さ42㎝と大きな石材を使用し、右側は長さ20㎝・高さ30㎝の右側壁の腰石との間を詰める程度の小形の石材を使用している。



第13図　王丸高熊遺跡遺構配置図（1/200）



第14図　王丸高熊遺跡1号墳主体部実測図（1/40）

玄室プランは長方形である。

右側壁の腰石は、比較的詰めて据えており、奥壁の横と腰石の面をあわせているのに対して、左側壁の腰石は、石材と石材の間が透いていて、奥壁と腰石の角をあわせる程度である。

左側壁は、3石の腰石の上に同等の間隔で石材を3石積み、奥壁側ではさらに同規模の石材を真上に積んでいる。

奥壁は、腰石の上に厚さ16㎝前後の石材を2段積んで、左側壁の3段目と高さを調整している。

右側壁においても、腰石の上だけに石材が残っており、左側壁と同様な積み方をしていたものと想定される。

敷石は、4㎝から10㎝程度のやや角張った礫を使用している。

石材は、いずれも花崗岩である。また、石室内の壁面および敷石には、赤色顔料が所々に塗布されている。

(2) 出土遺物

玄室床面より、鉄刀片や刀子などが出土し、鉄鏃は、束状で検出された。

鉄　器（第15図・第5表・図版11－72）

武　器

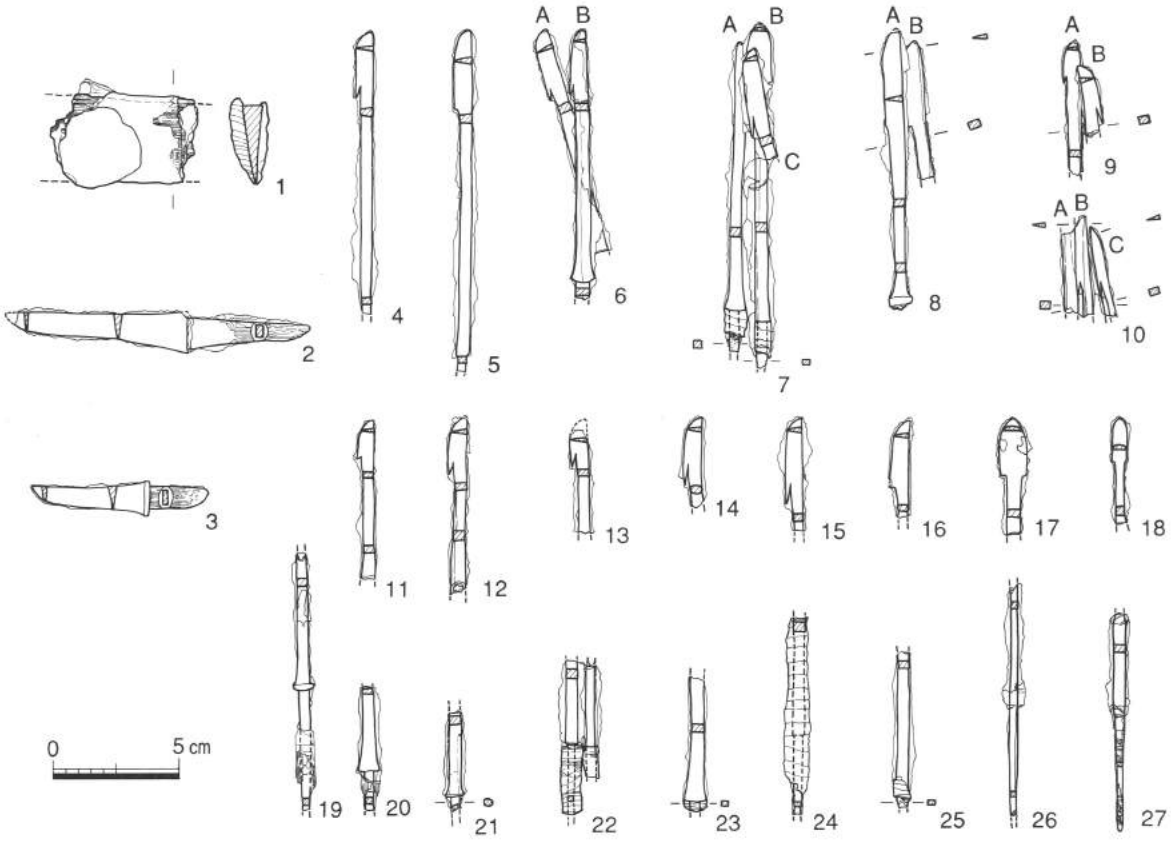
鉄刀(1)は、玄室内埋土より検出されたが、刀身部の一部である。鉄身に木質が被っており、本来鞘に納められていたと想定される。現存長5.7㎝・身幅3.2㎝・背の厚さ8㎜を測る。

鉄鏃(4～27)は、墓道側の右側壁床面で2つの束となって検出された。いずれも尖根式である。(4～16)は、鏃身部が片刃矢造りで逆刺をもつタイプである。鏃身部の断面は、2辺の長い三角形で篦被部は断面長方形である。(17・18)は、鏃身部が片丸造りの鑿箭式で篦被部は断面長方形である。(19～27)は、いずれも篦被部から茎部である。

工　具

刀子(2)は、束で検出された鉄鏃群の直上より検出された。切先の一部を欠損するほかは残りが良い。刃部は、やや反っており、関は、両関造りで、茎は、関から茎先端と平行して木質の繊維が残る。刃部長6.9㎝＋α・関幅1.6㎝・茎長4.8㎝を測る。

刀子(3)は、束で検出された鉄鏃群よりやや奥壁側で単独で検出された。ほぼ完形で(3)に比べると小さい。刃部は、やや反っており、関は、両関造りで、茎は、関から茎先端と平行に木質の繊維が残る。刃部長4.6㎝・関幅1.4㎝・茎長2.3㎝を測る。



第15図　王丸高熊遺跡出土鉄器実測図（1/3）

第5章　王丸出口遺跡

Ⅰ．はじめに

本遺跡は、宗像市の南西部で、宗像郡福間町との境にある許斐山（271m）の北東側裾に派生する舌状丘陵上に分布する数基の古墳から構成されている。当古墳は、宗像市遺跡詳細分布調査によって発見されたものである。

現状は、国道3号線建設やその周辺の宅地造成等に伴い、著しい改変を受けている。遺跡の最北端に位置している古墳は、石室が半壊して崖面に露出した状態であり、このままでは、自然崩壊が進み全壊する危険性があるため今回の調査となった。

調査区のほとんどが宅地によって削られているが、約50㎡という狭い範囲でかろうじて自然地形が残る。この自然地形は、標高34.50mから40.25mの範囲に広がっており、古墳はその最高所にある。丘陵は、さらに東北東方向へ伸びていたが既に削平されており、この古墳以外にも遺構が存在していた可能性は高い。

Ⅱ．発掘調査の記録

1．1号墳

（1）遺構

墳丘および外形（第16図・第2表）

古墳は、径約10mほどの円墳であると想定できるが、墳丘は著しい改変のため盛土の詳細な範囲は認められなかった。墳丘東側では、崖の断面に地山整形と幅0.35mの溝を確認した。溝は、自然地形で残る幅1.5mの範囲にのびると想定されたが、南側半分に樹木があり、地権者と協議の結果調査することができず、一部検出したに留めた。

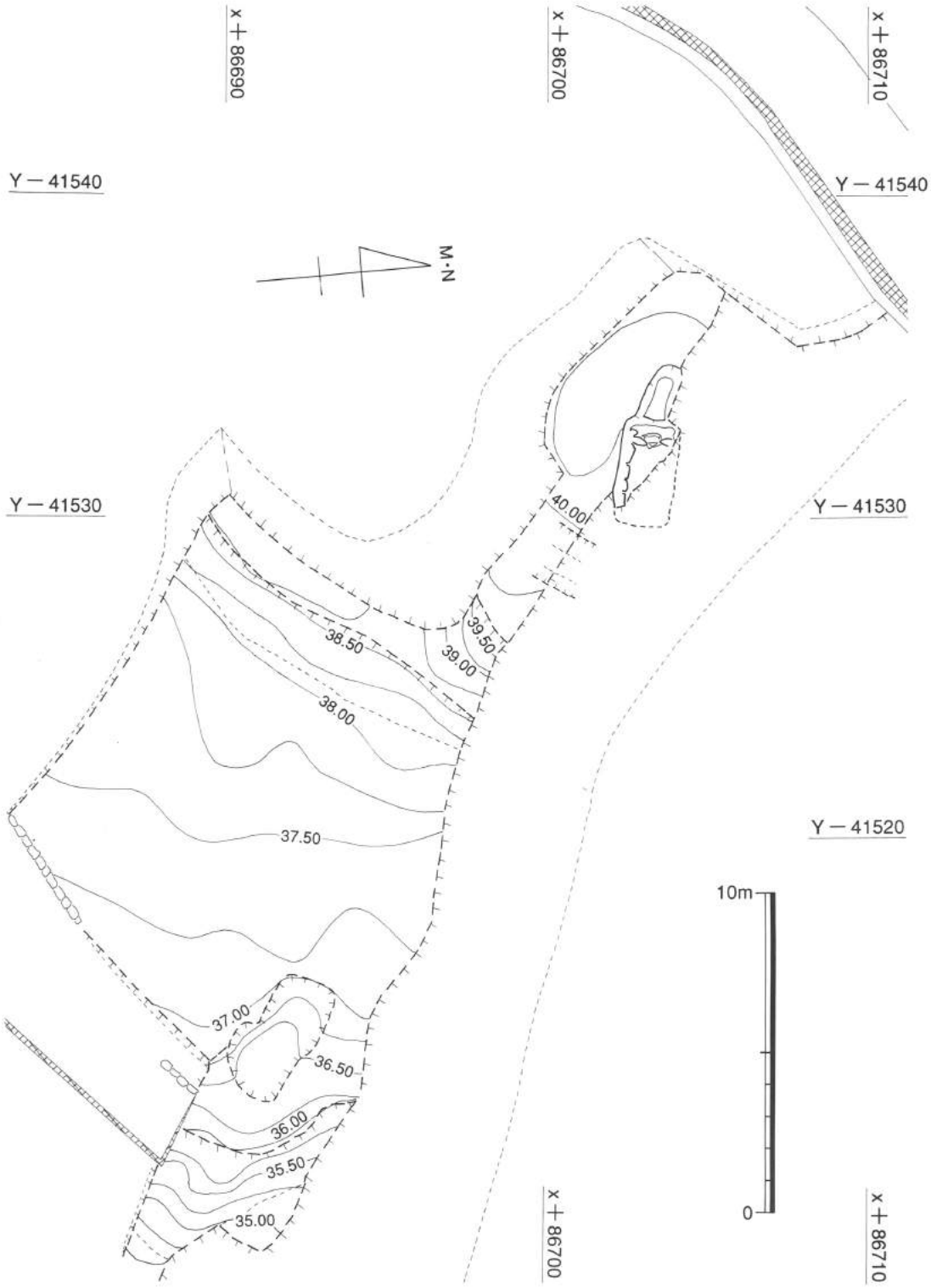
主体部（第17図・第3表・図版11－68～71）

埋葬施設は、主軸をN－72°－Wにとり、西北西方向に開口する単室の横穴式石室である。

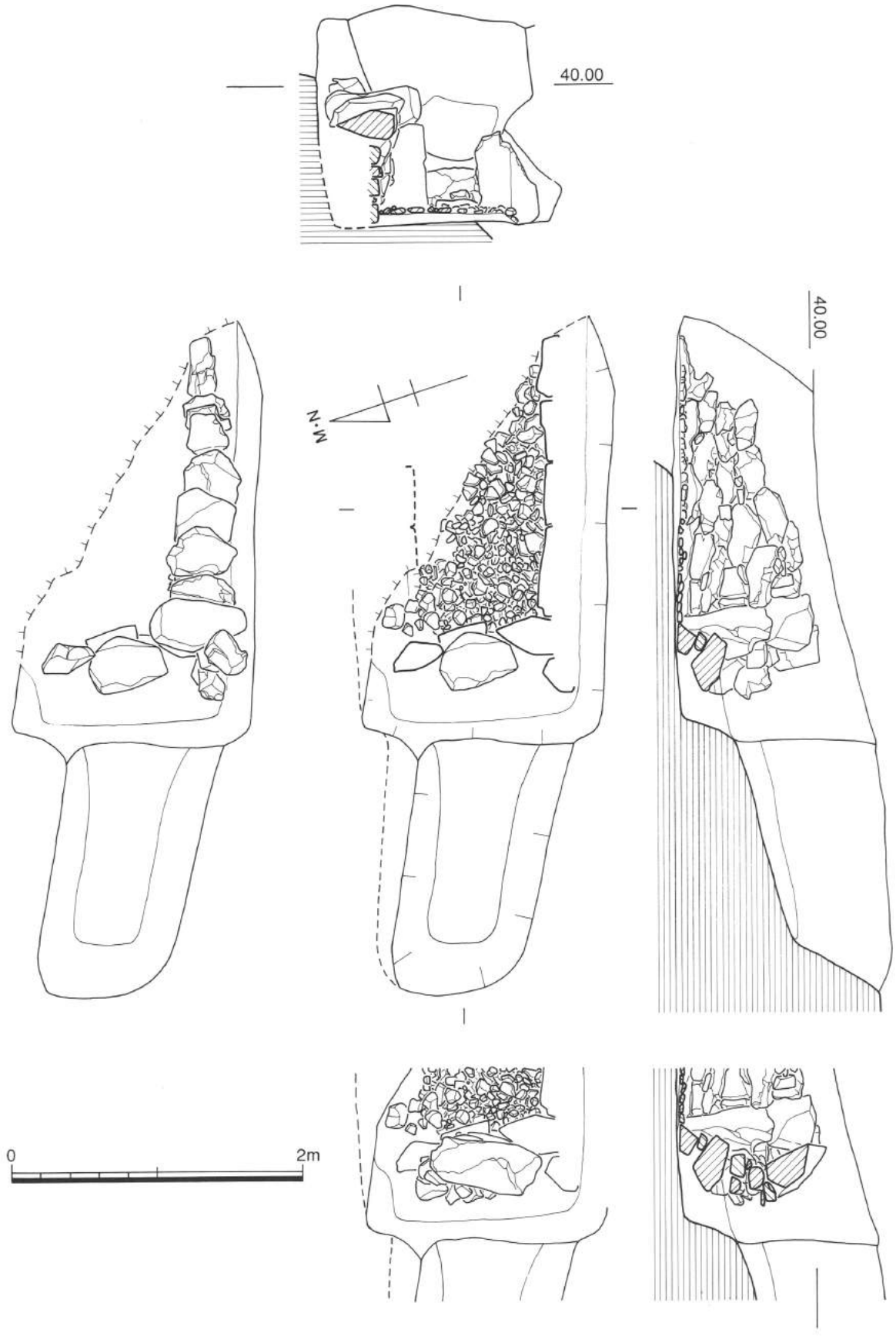
墓壙は、地山から掘り込まれており、南側はほぼ完存するが、東側短辺と北側の墓道を含む長辺は法切りになって削られる。墓道は、西側の短辺を切って付設している。

石室の破損状況は、天井石は既になく、玄室内は、左玄門側の腰石から右奥壁側の腰石にかけて、崖面の断面に露出し、斜めに削られている。したがって、左側壁は、玄門側腰石1石のみ石抜痕を残し、奥壁を含めて失う。

石室は、玄室右側の側壁と前庭部、左右共に袖石が残っており、特に玄門側の右側壁は、最も破壊を免れ、腰石より上に5段目まで残っている。



第16図　王丸出口遺跡遺構配置図（1/200）



第17図　王丸出口遺跡1号墳主体部実測図（1/40）

玄室プランは、この腰石から判断すると長方形と想定される。

右側壁の腰石は、玄門側の1石が、幅70㎝とやや長い石材を使用し、他3石は、長さ50㎝とほぼ同等の規模の石材を使用している。腰石の上には、整然と2段目から3段目と積み上げられるが、墓道側がやや低くなったため、4段目で墓道側にやや大きめの石材を用いて高さを調整しているが、水平がつかず、5段目を積んでいる。ただし奥壁側には、4段以上の石材が残っていないため詳細は不明である。

左側腰石は、墓道側の1石が抜き跡の一部と根石を残すのみで他は失う。

玄室床面は、全面に敷石を敷いているが、右側腰石の墓道側から2番目までは、4㎝から6㎝大の礫を平均的に用い、奥壁側では、10㎝平均の礫を敷き並べていて大きさが異なる。

地山と敷石の間は、暗褐色粗粒質土を貼っており、敷石の安定を図っているものと想定される。

袖石は、玄室側壁と前庭側壁に組み込まれ、玄門部を構成している。左右共に縦長の石材を立てて用いその上に1石積んで天井石が架けられていたものと想定される。左袖石は高さ52㎝、右袖石は高さ62㎝で右側壁の4段目の高さで調整している。

前庭側壁は、塊石積みされた3石で構築され、その隙間に小礫を埋め込んでいる。

框石は、2段で構成され墓壙底と墓道の高さを調整している。1段目は、長さ32㎝・幅22㎝・高さ13㎝で2段目との間に小礫を挟み、2段目は、長さ54㎝・幅40㎝・高さ22㎝の礫の平面を生かすように用いられている。墓道と框石の間の裏ごめ土は、敷石下層と同様暗褐色粗粒土を用い硬く締まっている。

閉塞石は、10㎝から20㎝大の礫を塊石積みし、その上に長さ75㎝・高さ30㎝から40㎝の1枚岩を使用している。追葬時には、この1枚岩を開閉していたのではないかと想定する。

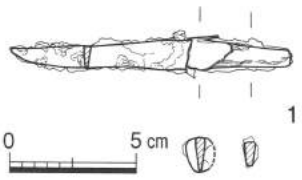
(2) 出土遺物

玄室床面の右側壁中央より刀子1点が出土した。

鉄　器（第18図・第5表・図版11－72－0）

工　具

刀子(1)は、刃部を床面に切先を右腰石に向けて検出された。比較的残りがよく関は両関式で、茎は木質が残っている。刃部の長さは7.0㎝・関の幅1.2㎝・柄の長さ4.1㎝を測る。



第18図　王丸出口遺跡出土鉄器実測図（1/3）

第2表　古墳の規模一覧表

古墳番号	立地	墳形	墳丘規模	方向	墓壙最大長	墓壙最大幅	墓壙最深部	構造	主軸	玄室床面標高	玄室面積	外部施設
王丸長谷遺跡												
1号墳	丘陵尾根	円墳	8m	尾根線平行	3.3m		0.6m	横穴式石室	南西に開口	58.6m	4㎡	馬蹄形溝
2号墳	北東斜面	円墳		尾根線直行	4.5m	2.9m	0.8m	横穴式石室	南東に開口	53.4m	3.3㎡	
3号墳	丘陵尾根	円墳	8m	尾根線平行	3.7m		0.5m	横穴式石室	南西に開口	60.3m	2.8㎡	馬蹄形溝
4号墳	丘陵尾根	円墳		尾根線直行		1.5m	0.2m	横穴式石室	南東に開口	62.7m		
5号墳	丘陵尾根	円墳		尾根線直行		2.8m	0.6m	横穴式石室	西に開口	68.2m		
王丸高熊遺跡												
1号墳	丘陵尾根	円墳	12m	尾根線平行		2.5m	0.7m	横穴式石室	西に開口	51.8m	1.7㎡	
王丸出口遺跡												
1号墳	丘陵尾根	円墳	10m	尾根線直行		1.7m	1.3m	横穴式石室	西北西に開口	39.1m		馬蹄形溝

第3表　古墳主体部計測表

単位はすべてm

古墳番号	石室長		玄室長		玄室幅			羨道長		前庭長	前庭幅	袖石幅	奥壁～第2框	奥壁～第1框
	左	右	左	右	奥	中央	前	左	中央	左	奥	玄門		
王丸長谷遺跡														
1号墳	364		278			144						50＋α	270	
2号墳	525＋α	455＋α	213	211		150	138	155	98	110＋α	70	64	220	375
3号墳		297		250									255	
4号墳				96＋α		65								
5号墳			170＋α	239＋α	117	143								
王丸高熊遺跡														
1号墳			178	158	102	96								
王丸出口遺跡														
1号墳		250		192								35		

第4表　王丸長谷遺跡土器計測表

単位はすべてcm

報告番号	出土地点	種類	法量					備考
			口径	器高	基部・頸部径	胴部径	底・脚径	胎土・焼成・色調
1	2号墳玄室部	須恵平瓶	7.4	14.4	5.3	16.2	8.4	2mm以下の白色砂粒を含む。良好・青灰色から黒灰色
2	2号墳玄室部	須恵長頸壺	17.8	18.5	4.5	16.4	9.4	1～5mm大の石英や長石を含む。良好。青灰色から黒灰色
3	2号墳玄室部	須恵高杯	9.6	8.2	1.9		7.6	白色の細砂粒を多く含む。やや良。暗灰褐色
4	2号墳墓道	土師高杯	12.6	10.1	3.1		9.9	白色の細砂粒を多く含む。やや良表面風化。赤褐色～黄褐色
5	2号墳墓道	土師高杯	12.8		3.0			2～5mm大の長石を所々含む。やや良表面風化。赤褐色～黄褐色
6	2号墳墓道	須恵甕						粘性が強い。良好。紫灰色～灰褐色
7	3号墳	須恵甕	17.8		12.2			白色の細砂粒を多く含む。やや良。青灰色～灰褐色
8	3号墳	須恵甕						白色粒や黒色粒を含むシルト質。やや良。黄灰色～暗灰色
9	3号墳	須恵甕						白色の小礫を含みやや瓦質。やや良。黄灰色
10	3号墳	須恵甕						白色粒や黒色粒を多く含み軟質。不良。緑灰色

第5表　金属器・装身具計測表

	報告番号	出土地点	種　類	形　式	計　測　単位はすべて mm
王丸長谷遺跡	1	2号墳羨道部	鉄刀	直刀	刀身長504・刀身幅33～28・背厚6・茎長55＋α・茎幅20
	2	2号墳羨道部	鉄斧	鍛造	全長77・刃部幅45・刃部厚4
	3	2号墳羨道部	耳環	銀環	直径20～19・断面径6.5×5
	4	2号墳羨道部	鉄鏃	広根方頭	鏃身部長74.5・鏃身部幅28.5・茎長39
	5	2号墳羨道部	鉄鏃	広根方頭	鏃身部長75＋α・鏃身部幅27
	6	2号墳羨道部	鉄鏃	広根方頭	鏃身部長65＋α・鏃身部幅28
	7	2号墳羨道部	鉄鏃	広根方頭	鏃身部長43＋α・鏃身部幅27
	8	2号墳羨道部	鉄鏃	広根方頭	鏃身部長47.5＋α・鏃身部幅27
	9	2号墳羨道部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長9・鏃身部幅7・篦被部長87・茎部長33
	10	2号墳羨道部	鉄鏃	尖根	篦被部長96
	11	2号墳羨道部	鉄鏃	尖根	鏃身部長25・鏃身部幅8
	12	2号墳羨道部	鉄鏃	尖根？	茎部長33＋α
	13	2号墳羨道部	鉄鏃	尖根？	茎部長48＋α
	14	2号墳羨道部	不明鉄器		
	15	2号墳羨道部	不明鉄器		
	16	3号墳玄室部	鉄刀	直刀	刀身長557・刀身幅30～25・背厚4・茎長88・茎幅15
	17	3号墳玄室部	鉄刀	直刀片	刀身長63・刀身幅26・背厚4
	18	3号墳玄室部	鉄鏃	広根圭頭三角形	鏃身部長81・鏃身部幅36・茎部長36
	19	3号墳玄室部	鉄鏃	広根圭頭三角形	鏃身部長75・鏃身部幅33・茎部長9＋α
	20	3号墳玄室部	鉄鏃	広根腸抉	鏃身部長42・鏃身部幅36・茎部長36＋α
	21	3号墳玄室部	ガラス玉	丸玉	径11.0～9.5・高さ8・孔径2
	22	3号墳玄室部	ガラス玉	小玉	径4.5・高さ4・孔径1
	23	3号墳玄室部	ガラス玉	小玉	径5・高さ4・孔径1
	24	5号墳玄室部	鉄鏃	尖根鏨箭	鏃身部長27・鏃身部幅12・茎部長80
	25	5号墳玄室部	鉄鏃	尖根？	篦被部長64＋α・茎長48
王丸高熊遺跡	1	1号墳玄室部	鉄刀	直刀	刀身部長57・刀身幅32・背厚8
	2	1号墳玄室部	刀子		刀身部長69＋α・関幅16・茎部長48
	3	1号墳玄室部	刀子		刀身部長46・関幅14・茎部長23
	4	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長26・鏃身部幅8・篦被部長90＋α
	5	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長31・鏃身部幅7.5・篦被部長98・茎部長6＋α
	6—A	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長25・鏃身部幅7・篦被部長68＋α
	6—B	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長25・鏃身部幅6.5・篦被部長79・茎部長6＋α
	7—A	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長33・鏃身部幅8・篦被部長19＋α
	7—B	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根鏨箭	鏃身部長27・鏃身部幅10・篦被部長96・茎部長18＋α
	7—C	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長20・鏃身部幅7・篦被部長87・茎部長16＋α
	8—A	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根鏨箭	鏃身部長15＋α・鏃身部幅10・篦被部長93・茎部長2＋α
	8—B	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長33・鏃身部幅9・篦被部長22＋α
	9—A	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長17・鏃身部幅6・篦被部長40＋α
	9—B	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長24・鏃身部幅6・篦被部長9＋α
	10—A	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根	篦被部長30＋α
	10—B	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	全長39錆により計測不能
	10—C	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長23・鏃身部幅8・篦被部長16＋α
	11	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長16・鏃身部幅6・篦被部長48＋α
	12	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長23・鏃身部幅7・篦被部長48＋α
	13	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長15＋α・鏃身部幅7・篦被部長32＋α
	14	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長28・鏃身部幅7・篦被部長17＋α
	15	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長35・鏃身部幅6.5・篦被部長19＋α
	16	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根片刃	鏃身部長27・鏃身部幅7・篦被部長11＋α
	17	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根鏨箭	鏃身部長23・鏃身部幅11・篦被部長23＋α
	18	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根鏨箭	鏃身部長18・鏃身部幅5.5・篦被部長25＋α
	19	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根	篦被部長55＋α・茎部長48＋α
	20	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根	篦被部長33＋α・茎部長16＋α
	21	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根	篦被部長33＋α・茎部長6＋α
	22—A	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根	篦被部長32＋α・茎部長28＋α
	22—B	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根	篦被部長32＋α・茎部長12＋α
	23	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根	篦被部長49＋α・茎部長4＋α
	24	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根	篦被部長47＋α・茎部長32＋α
	25	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根	篦被部長59＋α・茎部長3＋α
	26	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根	茎部長90＋α
	27	1号墳玄室部	鉄鏃	尖根	篦被部長40＋α・茎部長47
	王丸出口遺跡				
	1	1号墳玄室部	刀子		刀身部長70・関幅12・茎部長41

第6章　まとめ

今回の報告は、王丸長谷遺跡・王丸高熊遺跡・王丸出口遺跡の3件で、7基の古墳を調査した。そのなかで王丸長谷遺跡は、1つの丘陵に5基検出されており、丘陵単位の墓制の特徴を簡単に述べることとする。又、王丸高熊遺跡・王丸出口遺跡は、1丘陵における1基単独の調査であったため全体像がつかめないことから、個々の石室の特徴から王丸周辺の古墳の簡単な所見を述べてまとめとしたい。

立地は、王丸長谷遺跡の2号墳が、北東斜面に築かれている他はいずれも丘陵の稜線上である。これは、王丸長谷遺跡2号墳の築造時期がいずれの古墳より新しいため、尾根に選地できなかったものと思われる。

石室の開口方向は、王丸長谷遺跡1号墳と3号墳が南西方向の稜線にほぼ平行であり、2号墳・4号墳は南東方向、5号墳は西方向で稜線にほぼ直行する。

石室の構造は、2つのタイプに分けられる。

Ⅰタイプ・石材は、側壁の腰石が4石で積石の石材と規模が同等かやや大きいものを使用している。奥壁は、2石で構成され左右の大きさが異なる。前庭側壁は、ほとんど発達せず、墓道は上り傾斜である。開口方向は、丘陵尾根の稜線に平行である。閉塞石は、框石から2、3段まで平石を積み上げその上に円礫を塊石積みしており、追葬を意識しているものと思われる。

Ⅱタイプ・奥壁および側壁の腰石は、その上に積む石材に比べ格段に大きい。開口方向は、丘陵尾根の稜線に直行し、墓道は下る。

Ⅰタイプは、王丸長谷遺跡1号墳、王丸出口遺跡1号墳に該当し、王丸清勢遺跡1号墳とほぼ同時期で本遺跡では上限であると想定される。

Ⅱタイプは、王丸長谷遺跡2号墳・5号墳が該当する。時期決定できる遺物は、王丸長谷遺跡2号墳の玄室床面より出土した平瓶、長頸壷、高杯で、いずれも小田編年のⅣA期と推測され、本遺跡の下限に位置づける。

参考文献

王丸清勢　福岡県宗像市王丸所在遺跡の発掘調査報告書　宗像市文化財調査報告書　第33集　1991
王丸清勢Ⅱ　福岡県宗像市王丸所在遺跡の発掘調査報告書　宗像市文化財調査報告書　第35集　1992
古墳辞典　大塚初重・小林三郎編　東京堂出版　1973
須恵器集成図録　第五巻　西日本編　舟山良一・松本敏三・池田榮史編　雄山閣出版株式会社　1996

図　　版

（1）遺跡周辺の航空写真（1/12,500）昭和53年6月撮影　1. 王丸長谷遺跡　2. 王丸高熊遺跡　3. 王丸出口遺跡

（2）王丸長谷遺跡全景（東から）

（3）王丸長谷遺跡全景（北から）

（4）１号墳現況（南から）

（5）１号墳現況（北から）

（6）１号墳閉塞石（玄室から）

（7）１号墳閉塞石（上から）

（8）１号墳主体部（東から）

（9）１号墳主体部（南から）

（10）１号墳主体部（框石除去）

（11）１号墳玄室部（右側壁根石）

（12）2号墳主体部

（13）2号墳羨道部から玄室を臨む

（14）2号墳閉塞石（墓道から）

（15）2号墳閉塞石（北から）

（16）2号墳玄室内出土遺物

（17）2号墳羨道内出土遺物

（18）２号墳玄室部（奥壁）

（19）２号墳玄室部（奥壁根石）

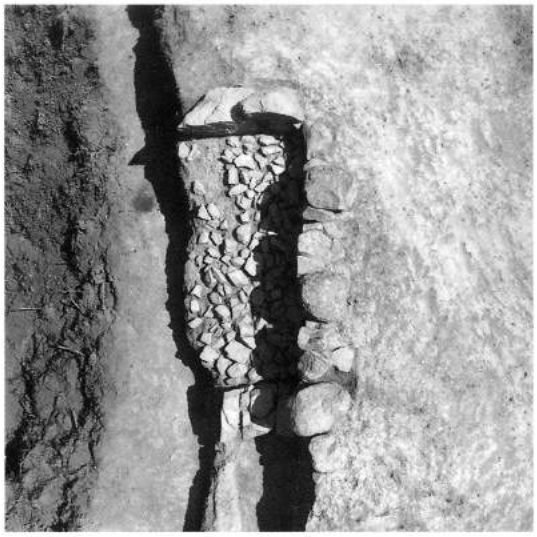
（20）２号墳玄室部（左側壁）

（21）２号墳玄室部（左側壁根石）

（22）２号墳玄室部（右側壁）

（23）２号墳玄室部（右側壁根石）

（24）3号墳・4号墳全景



（25）3号墳主体部

（26）3号墳閉塞石（玄室から）

（27）3号墳玄室内出土遺物

（28）4号墳主体部（東から）

（29）4号墳主体部（南から）

（30）５号墳遠景（南から）

（31）５号墳主体部

（32）５号墳玄室部（左側壁）

（33）５号墳玄室部（奥壁）

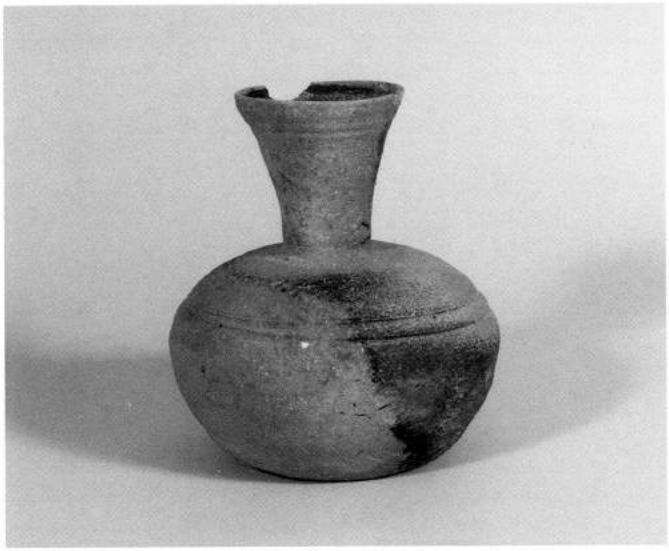
（34）５号墳玄室部（右側壁奥壁コーナー）

（35）５号墳玄室部（右側壁）

（36）５号墳玄室内出土遺物

（37）５号墳玄室部（根石）

（38）2号墳玄室内出土遺物



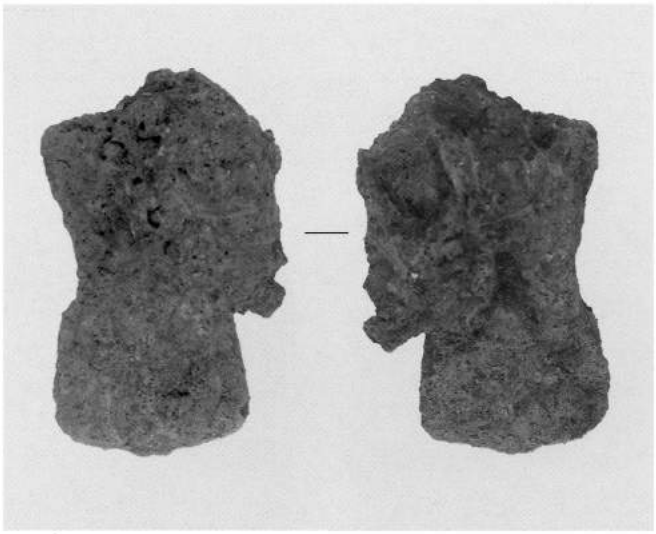
（39）2号墳玄室内出土遺物

（40）2号墳玄室内出土遺物

（41）2号墳墓道出土遺物

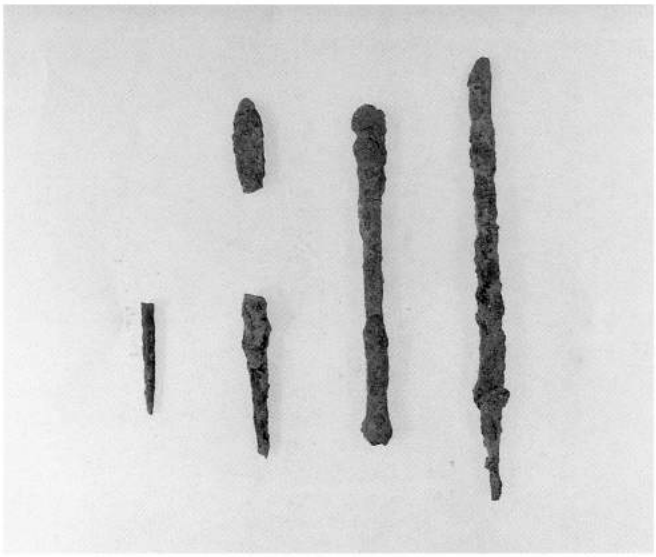
（42）2号墳墓道出土遺物

（43）2号墳墓道出土遺物



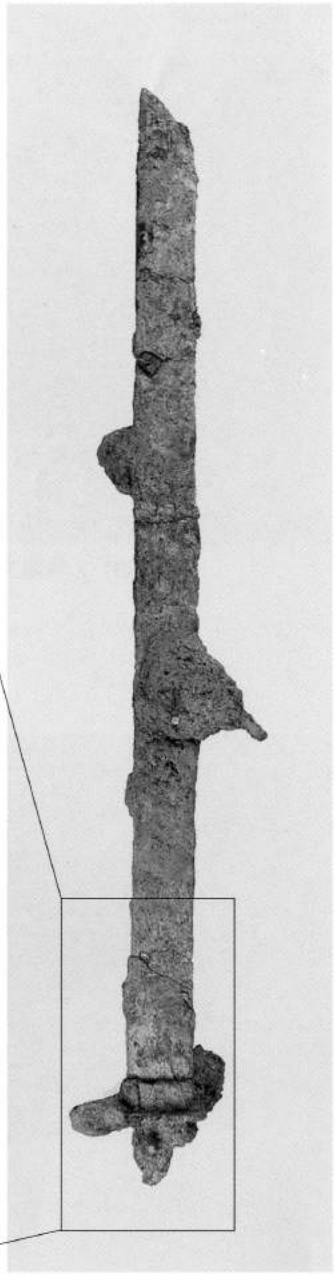
（44）２号墳羨道部出土遺物　（45）２号墳羨道部出土遺物

（48）２号墳羨道部出土遺物

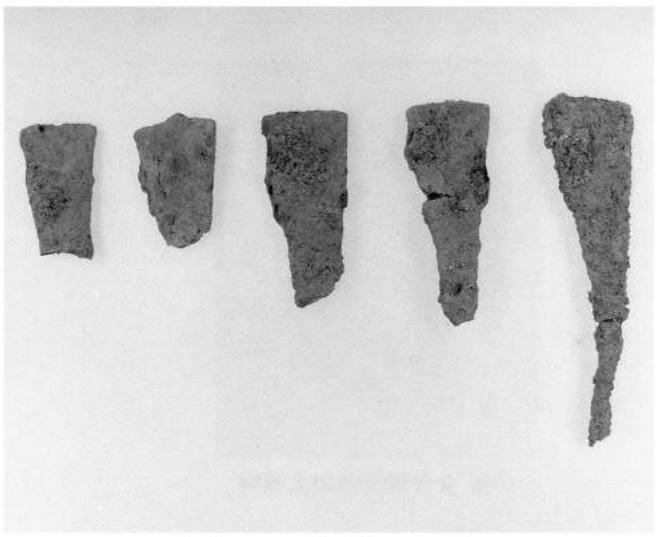


（46）２号墳羨道部出土遺物

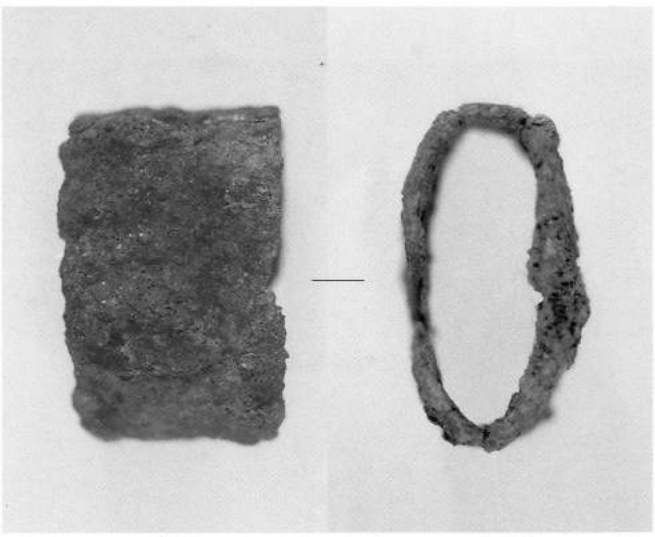
（49）２号墳羨道部出土遺物



（50）２号墳羨道部出土遺物



（47）２号墳羨道部出土遺物

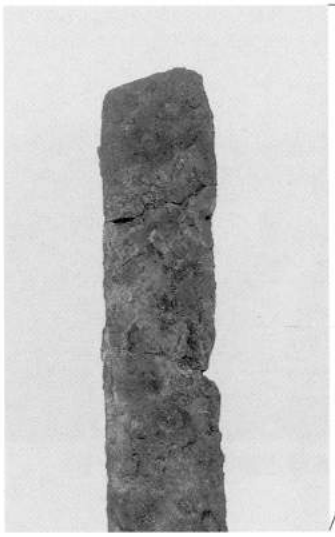


（51）２号墳羨道部出土遺物　（52）２号墳羨道部出土遺物

（53）3号墳馬蹄形溝内出土遺物

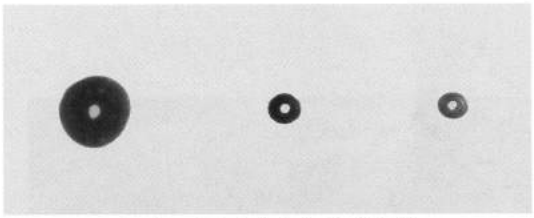
（54）3号墳馬蹄形溝内出土遺物

（55）3号墳馬蹄形溝内出土遺物

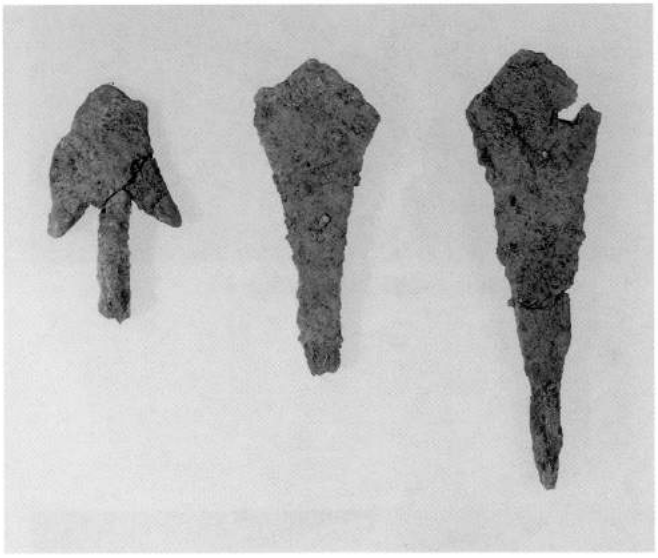


（57）3号墳玄室内出土遺物

（58）3号墳玄室内出土遺物



（59）3号墳玄室内出土遺物



（60）3号墳玄室内出土遺物

（56）3号墳馬蹄形溝内出土遺物

（61）5号墳玄室内出土遺物

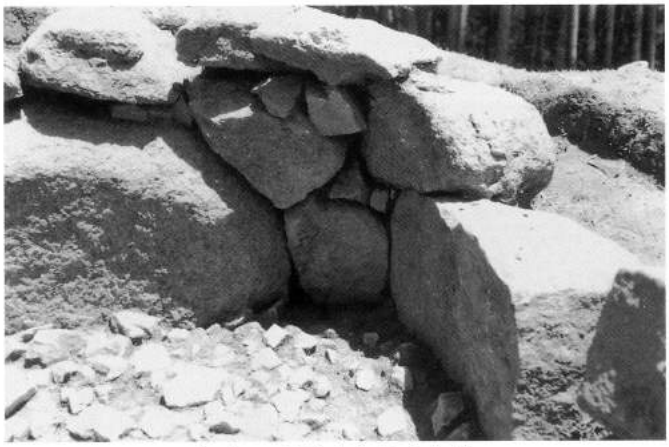
王丸高熊遺跡

（62）王丸高熊遺跡遠景（南西から）

（63）1号墳近景（南から）

（64）1号墳主体部（西から）

（65）1号墳玄室部（左側壁）



（66）1号墳玄室部（奥壁）

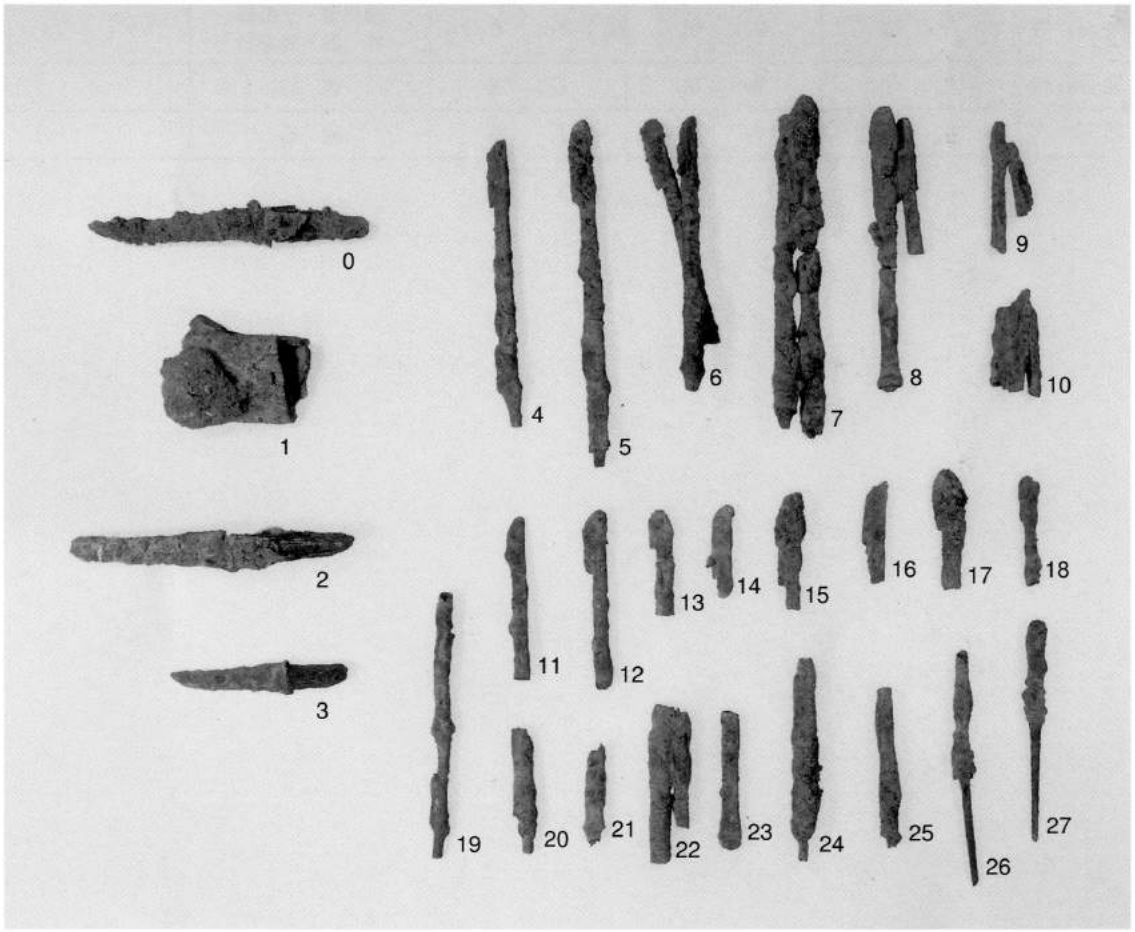
（67）1号墳玄室部（右側壁）

（68）王丸出口遺跡遠景（北から）

（69）1号墳近景（北から）

（70）1号墳玄室部

（71）1号墳玄室部（右側壁）



（72）王丸出口遺跡（0）・王丸高熊遺跡（1～27）主体部内鉄器出土遺物

報　告　書　抄　録

フリガナ	オウマルナガタニ
書名	王丸長谷
副書名	福岡県宗像市王丸所在遺跡の発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	宗像市文化財調査報告書
シリーズ番号	第44集
編著者名	岡　崇
編集機関	宗像市教育委員会
所在地	〒811-3492 福岡県宗像市大字東郷995番地　TEL（0940）36－1540
発行年月日	西暦 1998年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
オウマルナガタニ 王丸長谷	ムナカタシオオアザオウマル 宗像市大字王丸1153他	40220	330669	130度 32分 24秒	33度 46分 50秒	1996.4.1 ～ 1997.4.30	1000㎡	土砂採取
オウマルタカクマ 王丸高熊	ムナカタシオオアザオウマル 宗像市大字王丸1231他	40220	330667	130度 32分 26秒	33度 46分 58秒	1994.4.20 ～ 1994.6.6	200㎡	土砂採取
オウマルデグチ 王丸出口	ムナカタシオオアザオウマル 宗像市大字王丸427－9他	40220	330569	130度 33分 05秒	33度 46分 52秒	1995.4.19 ～ 1995.5.28	50㎡	防災

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
王丸長谷	古墳	古墳	石室	須恵器・土師器 鉄器・装身具	
王丸高熊	古墳	古墳	石室	鉄器	
王丸出口	古墳	古墳	石室	鉄器	

王丸長谷遺跡

宗像市文化財調査報告書

第 44 集

平成10年 3 月31日

発行　宗像市教育委員会
福岡県宗像市大字東郷995番地

印刷　(有)青雲印刷
北九州市小倉北区熊谷4－1－1